
紅鬼-ORGA-

桑名 村正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅鬼 - ORGA -

【Nコード】

N6893X

【作者名】

桑名 村正

【あらすじ】

—これは正義の物語ではない—

鬼哭編―陰―

全てが紅く染まっていた。

時は既に深夜。

そうでありながらも、その屋敷は煌々と照らし出されていた。

燃え盛る紅蓮の焰によって。

屋敷の中、ほぼ全てが火に覆われていたが、唯一火の手が弱い場所があった。

小さな一室だった。

年季の入った箆笥は、その上に乗っている可愛げの無い布人形と共に、徐々に炭へと変わりつつあるが、そこから先は何かに阻まれるように畳が燃え上がることは無かった。

部屋のあるのは二つの影。

一つは紅の装束を纏った、白髪青年。

一つはその少年に抱きかかえられ、幸せそうに眠る少女。

死を受け入れたかのように、二人はじっとその場で指一つ動かさなかった。

しかし、青年の瞳は諦めた人間のそれではなかった。

「約束しよう、……る」

木片の爆ぜる音に声をかき消されつつも、青年は語る。

永久に眠り続ける少女に。

永久に目覚めぬ少女に。

聞こえない事は承知している。

だがそれでも、青年は誓い続ける。

「俺はお前の望んだ世界を……臨もうとした世界を、必ず……る」

青年は徐々に温もりが失われていく少女を、死の淵へと逝かないように、引き留めるように強く抱いた。

「……………恐らく、死後……………ると会う事はないだろう」

純粹で、清らかな人道を歩んできた少女。

混沌で、血塗られた邪道を歩んでゆく青年。

二人が現世で出会った事自体が、有り得ぬはずの奇跡だった。
しかしそれでも、何の因果か応報か、彼は出会ってしまった。

己が全てを敵に回すことになるうとも、護りたかった者の清らかな夢を知ってしまった。

彼は変わらぬ表情のまま、双眸から二掬の涙を流した。

爆ぜる火の粉に包まれて

叫び狂うは紅き鬼

悪鬼の所業開始せり。

―これより修羅を開始する

彼の道、善なれば悪を斬る

彼の道、悪なれば善を斬る

劍鬼の理、此処に有り―

血潮編 其ノ壱

―夜が来る、闇が覆う、悪が蔓延る―

人知れぬ闇の中、人の肉を喰らい、骨を貪る悪鬼あり。
されども世は静かに回る、犠牲一つで止まる事を知らぬ。

―霜月八日十九時十三分・???路地裏―

「た、助けてくれ…！」

暗い路地の裏。

日は既に沈み、街の光の届かぬ場所で、男は子供のように泣きじやくりながら助けを求めている。

恐れ慄き、足をもつらせながらも必死に逃げる。時にはポリバケツや配水管にその身をぶつけながら。

それでも男は気にせず、涙ながらに足を動かす。

何処に、と聞かれれば、『アレ』がいないのならば何処でも良い、と答えるだろう。

では『アレは何か?』、と聞かれても、彼には答えられるわけがなかった。

何故ならそれは、およそこの世の者とは思えないほど、おぞましい者だったからだ。

「ゲゲツ…ケケカハ！」

低く、くぐもった声が裏路地に響いた。

生肉を叩きつけたような音をたてながら『ソレ』は男に追いついた。

その巨大な図体を引きずるように、それは男に近づいていった。
暗い為によく分らないが、背は少なくとも男の二倍はあるだろう。

身体の筋は酷く膨れ上がり、顔と肩が一体化しているようにも見える。

顔は酷く爛れて、齒は常に剥き出しで、一部からは骨が覗いている。

生きていることが不思議なほど狂っており、腐っていた。

その…化け物は、逃げる男を楽しそうに、しかしどこか悲しそうに追いかけていた。

しかしその鬼ごっこも、逃げ道がなくなれば終わりである。

そう、男の逃げた先は行き止まりだった。

慌てて振り返っても、そこには巨体が道を塞いでおり、越えようにも高さはビルの屋上ほどまで昇らなければならぬ。

並の人間にそんな事が出来るはずもなく、男は絶望に叩き落とされた表情をし、その場に座り込んでしまった。

「…助けてくれ…お願いだ…助けてくれよ…？」

最後の望みを込めて、男は『ソレ』に祈るように話しかけた。話を通じるかどうか、分からない。

恐らくは微塵も通じないだろう、そんな諦めがあらながらも、本能は生きる為の手段を、一切躊躇^{ためら}う事無く使っていた。

すると一瞬だけ、『ソレ』は動きを止めた。

「…グッ…ゲがけゴ…！」

『ソレ』は男が懇願した一瞬、頭を抱えてもだえ苦しんだが、文字通り一瞬の出来事だった。

「クフ、クケケフク！」

苦しみが治まった『ソレ』は、再び男に視線を向けて静かに笑った。

「あ、ああ…あああああ…」

彼の望みはそこで途絶え、その命の灯を、儚く消し去られた。辺り一面を、彼の紅い華で彩りながら…

―同日十六時三十八分―

「坂井会長、この件について聞きたいことが…」

私立神楽坂学園生徒会室で書類と向き合っていると、書記である

伊藤慎吾が躊躇いがちに尋ねてきた。

この学園に入学して二ヶ月で生徒会書記に立候補し、見事当選したのだがこれはやはり経験不足によるものだろう、能力があるにも関わらずいまいち自信が無い様で、時折小さなことで会長や他の役員に質問をしてくる。

「なにか分からないことでもあったの？」

「えっと、はい…実はこの部分なんです…」

そう言いながら会長である坂井の目の前に渡されたのは入学時に全校生徒を対象に取られたアンケートの用紙だった。

見てみると「一言要望」の欄に何かと赤ペンでマークをつけており、坂井は何となく伊藤の聞きたいことが分かった。

しかしあえて口にしない。

「成程、尋ねたいことは何となく分かったけど、聞かせてもらうわ」

「え…はい、えっと…ここに印をつけているように、生徒からの要望でかなりの数で部費を上げて欲しい、という意見が多く寄せられています…」

「そして君はこれに対してどう対処するべきだと思うの？」

「えっ、僕が…ですか?!」

逆に尋ねられるのは予想外だったのだろう、伊藤は目に見えて驚きの表情をしていた。

しかしそれも直ぐに元に戻り、伊藤は僅かに考えた後、思い切つて口を開いた。

「…そうですね、実績のある部活に集中させてしまつては新設したばかりの部活に十分に行き渡らなくりますから…更に詳細を書いた予算の使い道を提出してもらうことが良いかと…」

考える、というのはどう対処すべきかを考えていたのではなく、話すべきかどうかを伊藤は悩んでいたようだ。その証拠に、非常に明確な理由も添えた対処法を口にしていた。

その様子に会長である坂井陽菜子は静かに頷いた。

「確かに、それも一つの手ですね。しかしそうした方法を用いれば

人手が足らなくなる恐れもありますが、そのことに関しては…」

「言いだしたのは僕ですから、僕が最後までやります」

坂井が尋ねきる前に、伊藤は言い切った。

言ってしまったから伊藤は「少し図々し過ぎた」とても思ったのか、慌てて口を押さえた。

が、坂井の反応は彼にとっては予想外だった。

「いいでしょう、その心構えなら実行できますか？」

「え…そんな、僕の意見なんかをそんな簡単に採用しても…」

「もつと自信を持って大丈夫ですよ。悪くない…むしろ良い案だと思います。しかし、さすがに一人では大変だと思うので、生徒会全員でこれは行いましょう。皆さんも、問題ありませんね」

坂井が他の役員に尋ねると、全員が首を縦に振った。

つまりは了承した、ということだ。

「では、全員の賛成が得られたので、今年の予算案は詳細な予算利用予定表の提出をしてもらってから始めます。仕事量が多くなりますが、皆さんよろしくお願いします」

坂井がそう宣言すると、その場にいる全員が「はい！」と元気良く答えた。

坂井陽菜子は先述の通り、二年生でありながらも神楽坂学園の生徒会長であり、人望の厚い少女だった。

少女というには相応しくないほど大人びた雰囲気纏っており、外部から来た人からは教師と間違えられるほどである。

その人望の厚さは、彼女が困っている人を見ては放っておけない正義漢だから、というものからだろう。この際「漢」については追求しないで置く。

彼女が二年生でありながらも、前期で三年生を押し退けて生徒会長の任についているのも、彼女の方が三年の立候補者よりも頼りに見えたからだろう。

誰だってそう思うだろう、進学の為だけに「生徒会」の称号を得

ようとする人間に比べれば、生徒の為にその身を惜しむ事無く削る人間のほうが上に立ってほしいということは至極当然のことだ。

彼女が生徒会長の任に就いてから、約二ヶ月。彼女の行動の成果は徐々に現れ始め、学園全体が華々しくなった、とでも言うべきだろう。

一般生徒の中には「一年生の頃から始めればもつと良かったのでは？」という声も上がるほどになっていた。それも男女問わず、だ。何よりも彼女が人気な理由は、そのこれまで出した成果よりも、その人間性であろう。

困っている人間が居れば、分け隔てなく助け、悩み事があれば些細なことでも相談に乗り、まさに聖母という表現が当てはまるほどの善人だった。

その日の生徒会業務を全て片付け、坂井は家路についていた。他の役員に手伝ってもらうほどの仕事量ではなかったため、陽菜子が一人残って処理した。

神楽坂学園があり、陽菜子の家のある陣馬市は駅を挟んで住宅街側と学園・商店街側と分かれており、学園生のほぼ全てが線路を跨がなければ家に帰ることはできない。それは陽菜子も例外ではない。

まだ五時程度だというのに既に空には青みがかかり、徐々に黒く塗りつぶされていく。どれだけ街の光が輝こうとも、その黒を照らし出すことはない。

そして、その輝かしい光は地上すらも全てを照らし出せない。

ふと、わき道を見れば三メートルほどまでは道が照らし出されているが、それより奥となるとほぼ暗闇となり、十メートル先は完全な漆黒だった。

漆黒に塗りつぶされたのではない。漆黒を塗りつぶせないのだ。

しかしそれでも彼女は思う。

いつか必ず照らし出す。

いつか必ず塗りつぶす。

苦しむ人が苦しみ続ける世界であつてはならない。その為に自分が出来ることから…つまりは生徒会活動から始め、いつかはお世話になったこの町を、誰もが住みやすい平和な町にするために、何か貢献できればと考えている。

そんな事を思いながら歩いていると、わき道から僅かであるが何かがぶつかるような音が聞こえた。陽菜子は少し耳を澄ますと、「た、助けてくれ…！」と弱弱しいが助けを求める声が聞こえた。

これはただ事ではないと思い、考える間もなく声のした方向へと走り出した。

彼女には腕に覚えがある。

力無くして暴力を治めることは無理だということを子供の頃に痛感し。それ以降地元の道場で鍛えに鍛え、仕舞にはこの辺りで敵う者は殆どいない状態にまでなった。

当然、暴力には暴力ではなく、あくまで対抗する手段であつて、解決の手段としては使わない。それが彼女の信念だった。

今回もその場は抑えるが、一時治まってから話し合いで解決しようと考えていた。

相手も人間である以上、話が通じれば和解できる可能性も無いことはないだろう。彼女はそう考えていたのだ。

…その、化け物の姿を見るまでは…

声のした方へと陽菜子は必死に走った。

学内でも一二を競うその足が現場に着くまでに数十秒ほどかった。

「……？」

目の前には壁があつた。

それだけだった。

少し辺りを見回してみるが、声の主はいないようで、陽菜子は更に不思議に思い首をかしげた。

(…思い違いでしょうか…?)

それならそれに越した事はないが、どうにも違和感と不安が拭いきれない。

先ほどの助けを求める声は、大の男のもので、怯え具合からは余程のことがあったと見ても間違いないだろう。

それだと言うのに、周囲に人はいない。

どういふことだろうと考えようとしたところで、ようやく陽菜子は辺りの匂いに嫌悪感を覚えた。

肉を腐らせて放置したような匂いが裏路地に充満していたのだ。

(…酷い匂いですね…そこに散らばっているゴミでしょうか…)

倒れたポリバケツから匂いが発生していると陽菜子は思ってた近づくが、そこでおかしい事に気がついた。

…ポリバケツに入っていたものはダンボールだったのだ。

汚れた様子もなく、箱にプリントされているのは『業務用プリント用紙』や『プラスチックファイル』などの文具のものだった。

ダンボールをポリバケツに入れるのはどうかと…とも思ったが、問題はそこではない。

(…なら、この悪臭の原因は…?)

そう思ったところで、ビチャ、という湿った音が路地に響いた。

何かと思つて陽菜子が振り返ると…

先ほど、壁だと思つていたものが、蠢いていた。

「ヒツ…!?!」

陽菜子は思わず悲鳴を上げてしまった。

それと同時に、無意識的に口を抑えた。

そうした理由は、おそらく本能だろう。

危険を察知し、生き残ろうとする本能が、声を殺させ、蠢く『ソレ』からゆっくりと遠ざからせたのだろう。

腐臭は蠢く壁からしていることに陽菜子が気付くと同時に、壁から目らしきものが見えた。

視線が偶然重なってしまった。

それと同時に、陽菜子は体の向きを九十度変え、先ほど通つてき

た道を逆走した。

「ゲグオオオ！」

およそ人のものとは思えない悲鳴が、暗い路地に低く響いた。

…陽菜子は、『ソレ』と目が合った瞬間、見てはならないものを見てしまった。

人のものらしき、千切られた腕を、『ソレ』が貪っていたところを…

吐き気がする。

眩暈がする。

世界が狂う。

体が覚束おぼつかなくなる。

それでも必死に、来た道を駆け抜けた。

おそらく来た時をはるかに越える速度で。

それでも『ソレ』は追って来る。

最上級の獲物を見つけたような狩人のように。

歓喜して。

喚起して。

奮起した。

悪鬼だった。

(…な、何！？ アレは一体なんなの！？)

考えても答えが出ない問いだと分かっている、そう思わずにはいられなかった。

肺に残っている酸素を全て使っても逃げなければ。

しかし、『ソレ』は何処まで追って来るかは分からない。

もしかすれば、直ぐにでも追うのをやめるかもしれないし、永遠に追い続けるかもしれない。

ゴールの見えないレースで、ひたすら全力で走り続ける辛さを知り、必死に陽菜子は逃げる。

呼吸する事は既に忘れていた。

息をする一瞬で『ソレ』が追いついてくるかもしれない。

振り返った瞬間に、『ソレ』が彼女を喰らっているかもしれない。だから、全身の力を全て逃げることに注ぎ込む。

するとようやく大通りが陽菜子の眼前に見えた。最後は転げるように大通りに出ると、後方から足音が聞こえなくなっていたことにより、ようやく気付くことができた。

振り切ったのかと彼女は思ったが、そうではなかった。

…居る、のだ。

街の光に照らし出されぬよう、息を潜めている。

見えないが、確かにそこにいることが陽菜子には分かった。

（…光が苦手なの？）

最初陽菜子はそう思ったが、それが直ぐに間違いだと気付いた。

『ソレ』は陽菜子を諦めきれないように何度も影から手を伸ばす。

一瞬、その肉が眼前に迫ったので陽菜子は急いで後退し、距離をとった。更に右へと方向を変えると、腐肉はその動きに誘われるように向きを変えた。しかし腐肉は届かないと見ると、急いで裏路地へと手を戻した。

（…違う、光が苦手なんじゃない…多くの人に見られないようにしている？）

その考えが的を射ていたのか、集団の声が徐々に大きくなると『ソレ』は逃げるように去っていくのが音で分かった。

気配が完全になくなってようやく陽菜子は息をする事を思い出した。

長時間止めていた為だろう、酷く荒い息をしていた。

肺いっぱい酸素が行き渡ることがこんなにも生きていることを実感させる。

身体は小刻みに震えていた。恐怖からか、それとも生きていることへの喜びか。

「だ、大丈夫ですか…？」

その只ならぬ陽菜子の様子に声をかけずに入られなかったのだろう、仕事帰りのサラリーマンらしき中年男性が心配そうに声をかけ

てきた。

「え、はい…だ、大丈夫です…」

「本当ですか？　なんだか顔が青いようにも見えるけど…」

「は、はい。本当に…大丈夫です。少し走って息切れをしているだけなので…ご迷惑をおかけしました…」

陽菜子がそう言くと、男性は信じきれない様子をしながらもその場を去っていった。心の底から心配しているのだろう、その場を完全に立ち去るまで男性は時折陽菜子のほうへと振り返っていた。

…冬の足音も近づく季節だというのに、陽菜子の身体からは滝のような汗が流れていた。

「…会長、なんだか体調が悪そうですが…大丈夫ですか？」

三日後。

生徒会業務を行っている最中に、書記の女子からそんな事を陽菜子は聞かれていた。

書記の女子は躊躇いがちでありながらも、陽菜子の様子のおかしさに耐え切れず尋ねたようだった。

「え？　あ、いや。大丈夫ですよ」

「そうですか…？　なんだかここ三日間会長の元気がないように見えたので…」

「僕にもそう思えました」

会計の男子もそう言った。

するとそれを皮切りに生徒会役員全員が心配の声をあげた。

「確かに、ここ最近会長が少し静かになったような気がします」

「そうじゃないでしょ？　心なしかやつれた様な感じが…」

「あ、百合もそう思った？　私もそうじゃないかなって思っていたんだけど」

「あと時々小さな物音でも、反応したり…」

彼女は可能な限り平静を装っていたが、やはり隠しきれない部分はあったようだ。

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫です」

彼女達の心配は陽菜子にありがたいと同時に申し訳ない気持ちにさせた。

ありがたいというのは、些細な変化でも気付き、心配してくれる周囲の優しさに対してである。

申し訳なさは、それだけ心配してくれる役員達に対して正直に『あの事』を話せないことだ。

出来れば『あの事』を吐き出して氣を楽にしたい。

しかし、もし言ってしまうと彼、彼女達が『アレ』に巻き込まれたら…

おそらく話した自分を何時までも呪うだろう。

そして、『アレ』は可能ならば絶対に近づいてはいけない者だ。

陽菜子は本能的にそう悟っていた。

幸いこの三日間は何事もなく過ごすことが出来たが、幸運に幸運が重なっているだけかもしれない。何時何処で再びあの化け物に襲われるか分からない為、陽菜子は『あの事』以降ともに気の休まる時間が無かったのだ。

家に居ても眠っている間に襲われることもありえる。もし、あの化け物が学園に潜みこみ虎視眈々と私を狙っているとすれば…悪い想像は考え出すと止まる事を知らず、悪戯に陽菜子の精神を蝕んでいた。

「ところで先日頼んでおいたボールペンの補充は…？」

インクが切れかけているボールペンが多くなり始めたので、陽菜子が昨日庶務の男子に頼んでいた仕事を確認すると、庶務は忘れていたことを思い出したように「あっ！」と声をあげた。

「…忘れたんですね？」

「…す、すみません…」

「飯田君、なんだか体調が悪そうですが、大丈夫ですか？」

先ほど尋ねてきた女子の真似を陽菜子がすると、庶務の男子は恥ずかしそうに頭をかいた。その様子に周りにいた役員は思わず口を

抑えて笑いを堪えていた。

「いえ、自分は元氣だけが取り柄なので！」

「ですが部活の仲間との買い食いには気を取られて文具店で注文するのを忘れるのは感心しませんね」

「み、見てたんですか！？」

「いえ、想像です」

自ら墓穴を掘ってしまった飯田は更に縮こまった。

「…気配が濃厚になっている…木戸の情報に間違いはないみたいだな」

陣馬市南部にそびえる巨大堤防の上に、その男はいた。

堤防は海に接した陣馬市を津波や台風から守るために設置されており、その大きさはおよそ六メートル。長年陣馬市を守っているため所々に傷が目立つが、それでも揺らぐことのない石の壁はまさに陣馬市の守護神というべきだろうか。

一見、海の被害から陣馬市を守っているようにも見えるが、彼からしてみれば北部の山脈も含めて街の人間を取り囲んでいるようにも見える。

逃げ場を封じるように。

知らずに柵に囚われた羊のようにも、彼には見えた。

本来一般人の立ち入りを禁止しているこの場所にどうやってたどり着いたかは定かではない。一時的に彼は紅い目を光らせて街を見回す。

「…『怪異』は映らない…？ 気配がありながらも見る事はできない、なんて初めてだな」

信じられないといったように、今度は身を乗り出して街を見回した。

堤防の縁に片足だけを引っ掛け、艇子の原理で身体を地面に対し水平にする。当然、彼の身体は完全に中に浮く形になった。

しかしそんな雑技団も裸足の妙技をしながらも、彼は余裕の顔で

居た。

「……やはり反応はない……よっ」

勢いをつけて彼は元の体勢に戻る。それも彼にとっては大した事のない様だった。

彼の紅かった瞳は、普通の人間と同じく茶色に変わっていた。

「仕方が無い、名残から地道な調査を始めるしかないな……」

彼は視線を陣馬市北部に位置するとある場所へと向けた。

「……学園に接触した人間がいる可能性あり、か……忍び込むにはそれ相応の用意をしないとイケないな……」

そう言うとは彼は顔に手を当て力強く握る。

すると彼の顔は僅かに歪んだ。

手を離すと先ほどの顔とは異なり、少し若くなった少年の顔があった。

造りは同じだが、先ほどの精悍な顔つきとは異なり、どこか幼さとあどけなさを残した顔になっていた。

背も先ほどとは異なり、百八十をゆうに越える身長は百七十程度にまで縮んでいた。

「こんなものか……後は木戸に裏工作と更なる情報収集を頼んでおくか……」

それだけ呟くと、男……いや、少年は身体を翻した。

次の瞬間、巨大堤防の上には影一つ無かった。

血潮編 其ノ貳

「……」

陽菜子の足取りは重かった。

この三日間、出来る限り人通りの多い場所を選び、更には毎日違うルートを歩いていたが、やはり怖いものは怖いのだろう、彼女の手は触れなければ気付かれない程度だが震えていた。

今回は生徒会業務を早いうちに終わらせて、日がまだあるうちに帰る事にしたようだが彼女は安心しきれていなかった。

…何故その日は、『あの事』のあった道を通ろうとしたのか。

彼女にはそれが分からなかった。

無意識のうちに、例の化け物が最後に手を伸ばした場所にまでたどり着いていた。

「……」

そこには先客がいた。

意味深に化け物がいた裏路地へと視線を固定し、静かに眺める奇妙な少年がいた。

時折掛けている眼鏡を弄り、何かを呟き、動いたと思うとおもむろに地面をなぞり始めて裏路地へと進んでいった。

「あっ！」

思わず陽菜子は声をあげ、それが聞こえたのか少年は驚いたように飛び跳ね後退して裏路地から姿を現した。

「え、な、何か…？」

少年は何か自分が間違えたのではないかといった微妙な表情をして陽菜子を見た。サイズが合っていないのか、掛けている眼鏡は鼻先に引っかかり危うく落ちそうになっていた。

「あ、いえ……」

無意識的にあげた声に反応されたものだから、陽菜子はどう説明しようと頭を悩ませた。化け物の危険性を語ってもおそらく信じて

はくれないだろう。そう思って他の言い訳を考えた。

「そ、そこは…裏路地は危ないので、入らないほうがいいですよ？」

…間違った事は言っていない。そう思いながらも要点をえない説明に陽菜子は自己嫌悪していた。

その様子に少年はしばらく黙り、陽菜子を静かに見つめた。

「…ここで、何かあったんですか？」

「…えっと…す、少し凶暴な犬が徘徊しているので…」

端から見ても、陽菜子自身から見ても嘘だということが丸分かりの言葉を並べるが、これで少しでも警戒心を抱き、この場所から離れればと思っただけで出した策だった。

しかし、少年は陽菜子の予想をはるかに上回る反応をした。

「その凶暴な犬…もしかして、人の何倍も大きい『何か』ではないですか？」

その言葉は陽菜子を驚かすには十分な威力だった。

呆気にとられた陽菜子は何も言うことができなくなり、開いた口が塞がらなかった。

「すいません、そんな生き物が居るはずないですよね」

少年は先ほどとは違って明るい様子でそう言った。

そこでようやく陽菜子は我に返ることができた。

「そ、そうですね。取りあえずここは危険なので近寄らない方がいいですよ」

ようやく伝えたいことを伝えきり、陽菜子は安心したように息をついた。少年も裏路地は諦めたのか、静かにその場を離れて商店街の一家に入ってしまった。

陽菜子はそれを見て、その場を去ろうとすると今度は少年が彼女を呼び止めた。何かと試してみるとその手には某コーヒー有名店の紙コップが両手に握られていた。

「すいません。実は僕、この辺りに引っ越してきたばかりなのでこの辺りのことに詳しくないので…」

言いながら少年は陽菜子に半ば無理矢理その手に紙コップを握ら

せる。

「あ、冷めると美味しくないので早くどうぞ」

僅かにせかされて、陽菜子は慌ててコーヒーに口をつけた。入っていたのはカフェオレであり、苦味と甘みの丁度良いハーモニーと温かさが口いっぱいに広がった。

この三日間、何時襲われるかもしれないという恐怖感に常に襲われ、気が休まる時間が一時もなく、精神的には既にボロボロだった。食欲も無くなっており、水だけで過ごしてきたので三日ぶりの甘さと苦味は体中に染み渡った。

少年は陽菜子がカフェオレに口をつけたのを確認すると勢い良く話を切り出してきた。

「そこで厚かましいお願いですが、この街を案内してくれませんか？」

陽菜子はそこで気がついた。

報酬の前払い…これは断れなくなってしまった。

「名前は朱鷺沼真理（しづめま まり）といいます。どんな風に呼んでもらっても構いません」

出会った少年は陽菜子の隣で静かにそう言い、頭を下げた。一端静かな場所で落ち着いて話すよう決め、陽菜子が彼をここ・一葉公（いちようこう）園につれてきたのだった。

公園では子供たちが無邪気に遊具で遊んでおり、彼女達はそれを眺めるように公園の端にあるベンチの一つに腰を掛けて話し始めたのだった。先ほど朱鷺沼少年が渡したカフェオレはまだ温かく、冷めた手を温めるには丁度良い温度だった。

「坂井陽菜子です。よろしく」

陽菜子は朱鷺沼に釣られるように頭を下げた。

「引っ越して来たという事は…近いうちに神楽坂学園の編入試験を受ける予定ですか？」

「神楽坂？ そんな名前だったんですね」

「？ ええ、陣馬市に住む人は大抵そこに通いますから…そういう私も神楽坂の高校生です」

少年の反応に疑問を覚えながらも陽菜子は言った。

朱鷺沼の外見は中等生第三学年か高校生第一学年程度だった。

「そうなんですか。えっと、実は僕、両親の言うまま着いて来ただけなので通う学園の名前も知らないんです」

朱鷺沼は申し訳無さそうに頬を人差し指で掻きながら話した。

「どれぐらいこの町に居るかは分からないのですが…それでもこの町を良く知りたいと思って歩いていたんですけど…見事に迷ってしまっ」

「だからといって慣れない町で裏道を通ろうとするのは自殺行為ですよ？」

「反省してます…」

窺めるつもりはなかったのか、陽菜子は朱鷺沼が頂垂れると少し慌てた。

「いえ、怒っているわけではないので…」

「そういうわけで坂井さんに町案内をお願いしたのですが…」

「…成程、そういう風に持って行きますか…」

「わざわざ危険だと教えてくれるような人なら安心だと思って」

顔を上げた少年は微笑んでいた。

「…分かりました、分かる範囲でしか案内できませんが…」

幸い彼女にはこの後の予定がない上に、一人暮らしであるため家の門限は特にない。

彼女は学園に通う以前は両親と共に暮らしていたが、父親が転勤になり母親はそれに付いて行く事にしたので現在は住宅街側にある一軒家で暮らしている。

そこまでの理由は至極単純で、神楽坂学園が国内で上位を争う進学校であることと、父親の転勤が決まったのが学園に合格した後だったということだ。そのため、多少遅くなっても問題は無いと思いい、彼の頼みを引き受けたのだった。

「ありがとうございます！」

彼女の反応に朱鷺沼は元気よく答えた。突然の大声だったため、周囲の遊具で遊んでいた子供達は何事かと思つて全員がこちらを振り返つた。

自分の声が大きすぎたことに気づいたのだろう朱鷺沼は再び申し訳無さそうに体を縮めた。あまりに子供のような反応に思わず陽菜子はクスリと笑つてしまった。

「それじゃあ、これを飲み終えたら町を案内します」

互いの手にある物は、人肌程度に温くなつていた。

陣馬市はここ数年で爆発的に都市開発の進んだ元田舎町であり、南は海に、東西北は山に囲まれた土地であり、堤防もあるために人工的な盆地といった市だ。

先述通り北部には商店街と神楽坂学園があり、昔ながらの複雑な街の構造をしている。対して住宅地側はこの数年で開発された場所であるために盤目状に一戸建て住宅が並べられている。

まず陽菜子が案内したのは学園付近と商店街だった。

神楽坂学園は私立の進学校という事もあつてかセキュリティが非常に厳しく、部外者は事前の申告無しに入校することは難しい。

彼女の立場を利用して見学させることも不可能ではないが、長く時間がかかってしまい、更には制限時間を設けられてしまう上に監視付きという条件があるため、周囲から見た学園の紹介をした。

それをある程度簡潔に説明すると今度は商店街へと足を運んだ。

夕方になり各店は活気づき、呼び込みの声が右から左からと響き渡り、中央に立っていると何を言っているかさっぱり解らないほどの多重音声状態になっていた。

陽奈子は朱鷺沼に生活必需品を扱っている店を幾つか紹介し、それらすべての店を紹介し終わるとちょうど商店街側と住宅街側に分ける駅へとたどり着いた。

「……すいません、あそこにある高い建物は一体？」

駅構内を渡って向こう側に渡ろうと陽奈子が考えていると、朱鷺沼はいきなり足を止め、商店街側東部にある立てたばかりの高いビルを指さして静かに尋ねてきた。

「ああ、あれは『浦部グループ』の本社ビルだと聞いています」

「……『浦部』？」

「陣馬市の発展に大きく貢献したグループですね。というよりは陣馬市の開発を最初に提案して実行に移した張本人です。おかげさまで過疎化の進んでいた陣馬市に活気が戻ってきました。一年半程前に出来たので非常に新しいことと研究所が併設されていることが特徴です」

「ふむ……」

嬉しそうに話す陽奈子とは対照的に朱鷺沼はその建造物をにらむように見つめた。運よく陽奈子は朱鷺沼の後方にいたために彼の表情を見ることが出来なかった。

「……ですが、最近妙な噂が流れていますね」

「……噂ですか？」

陽菜子の呟きに朱鷺沼は聞き返した。

「はい。浦部グループがこの町に来てから事件が多くなった、と……そうなんですか？」

「確かに多くはなっているのですが……それも心なし感じる程度です」
「その事件に……浦部が関係していたらどう思いますか……？」

朱鷺沼は視線を一切変えずに陽菜子に尋ねた。

「……………え？」

予想外の質問に陽菜子は思わず聞き返してしまった。

あまりにも突然な話だったので、陽菜子の思考が追いつかなかったのだ。街を発展させた張本人が、街に被害を与えているなど誰が想像できようか。

陽菜子からの反応がないことを確認すると、朱鷺沼は笑いながら振り返った。

「失礼しました。冗談ですよ。でも、仮の話に真面目に付き合っ

しまう辺り、陽菜子さんは真っ直ぐで誠実なんですね」

先ほどの冷たい印象はなく、公園で話したときの朱鷺沼に戻っていた。

「か、仮の話…？」

「はい」

悪びれもなく朱鷺沼は答えた。

「いや、何かの小説で読んだ『巨大企業が黒幕で』という設定を思い出して言ってみただけです。まさかここまで真剣に反応されるとは思いませんでした」

からからと笑いながら無邪気に話す朱鷺沼に陽菜子は少なからず怒りを覚えた。

「そ、そういう話はきちんと前置きをして置いてください！『小説では』とか！」

「あははは！大抵の人は『そんな馬鹿な』で流していたから大丈夫だと思っていたので」

柄にもなく大声で怒る陽菜子に対して朱鷺沼は非常に楽しそうだった。

ここは駅周辺かつ今は帰宅時間なので人通りも多く、周囲にいた人たちは何事かと思つて遠巻きに眺めていた。

「何？何があつたの？」

「分からないわ。ただあの男の子が女の子を怒らせたみたいで…」

「もしかして痴話喧嘩じゃないのか？」

「だとしたら…男の子が二股でもかけていたのかしら？」

「ありえそうね…可愛い顔して…恐ろしい子！」

「あんな美人が彼女だというのに浮気なんて…ふざけている！こちらとら帰つても古女房しか待っていないんだぞ！」

「へ、誰が古女房ですって？」

「そりゃあ、俺のカミさんが…ってお前！？いつの間に！？」

「あんな美人が…のところかしらね？買い物帰りであなたを見かけたから声をかけようと思つて…」

「あ、あの…話し合えば分かる。だからその手に持っている唐辛子の束を仕舞って…」

「問答無用！」

「ぎゃあああああ！ 辛いいいいいいい！？」

彼女達の会話が新たな犠牲者を生み出していた。そのことによりやく気付いた陽菜子は逃げるように野次馬の輪を突破して駅へと走っていった。

野次馬の注意が中年夫婦の喧嘩に移ると、彼女を追うように朱鷺沼も歩き出した。

幸い野次馬に気付かれることなく無事に抜け出し、飄々と朱鷺沼はその場を後にした。

「ありがとうございます。ここまで大丈夫です」

駅構内を抜け、住宅街側の出入り口で息を切らしていた陽菜子に対し、朱鷺沼はそういった。

「…そ、そう…ですか」

息も絶え絶えながらも答える陽菜子はさすがというべきか、超が付くほどの真面目だった。落ち着いてから答えれば良いものを、わざわざすぐに返す辺り彼女の性格がよく出ている。

「ここからなら自分でもある程度地理は理解しているので…後は気ままに歩いてみます」

言うが早いか、朱鷺沼は陽菜子の返事を待たずに線路に沿って歩き始めた。

ぽつぽつと街灯が点き始め、彼の後を追うように光が街路を照らしていった。

陽菜子が息を整え、顔を上げると、そこには既に朱鷺沼の影はなかった。

「も、物凄くマイペースな人ですね…」

しかし思い返してみれば奇妙な少年だった。

公園で最初会った時は、大人しそうで控えめな性格に見えたが、

先ほどの様子からは非常に肝が据わっており、かつ朗らかな正確をしていたようにも陽菜子には見えた。

それはそう、まるで役を忘れた役者のようだった。

何をすべきか定まらずに、様々な行動をしているようにも見えた。そして一瞬感じた、冷酷な雰囲気。

僅か三時間のコミュニケーションではあったが、その間に彼はどれだけの役を演じ損ねたのだろうか。

「…考えても仕方が無いですね…」

おそらく彼にも事情があるのかもしれない。そう思って陽菜子は考えることを止めようとした。が、これまでの彼との会話で奇妙な点が幾つもあったことを思い出した。

『その凶暴な犬…もしかして、人の何倍も大きい』『何か』ではないですか？』

『浦部に原因があるとしても…？』

…そう、まるで何かを知っていながらも隠しているような反応が何回か感じられた。普段なら話半分に聞いているが、三日前のようなことを体験している陽菜子には意味深に感じられた。

もちろん、事件以降彼女が警戒心を強めているから過剰に反応しているということも充分にありえることだ。

「…帰って休みましょう…」

彼女の自宅は駅から約五分という場所にあるので、このまま帰れば夕飯の準備には十分な時間を確保できる。

両親が転居する以前から陽菜子は家事全般を行っていたのも加えて、この一年間の一人暮らしのおかげで短時間のうちに料理をする事も出来るようになっていた。

やるべき事を早く終わらせて興は早いうちに寝てしまおうと彼女は思いながら家路に着いた。

彼女が朱鷺沼を見つけることが出来なかった理由は至極単純だった。

光の届かない屋根の上にいたからだった。

彼女が朱鷺沼の向かった方向とは違う場所へ向かい、彼はその背を見送っていた。

完全に見えなくなることを確認すると、朱鷺沼はポケットに入っていた機器を取り出して一つボタンを押した。

それは奇妙な機械で、付いているボタンが三つしかなく、一見ではどういふものかは想像できないものだった。

簡単に説明すると、これは耳装着型の通信機器であり、通信対象は事前に設定した二人だけというものだ。汎用性は低いが非特性に優れており、特殊な手段を用いて通信しているため、会話を傍受される心配は皆無だ。

大きさは握り拳に収まる程度の大きさで非常に軽く、行動に一切の支障をきたさないことが最大の特徴だろう。

朱鷺沼はボタンを押すと手馴れた様子でその機械を装着した。

「木戸、頼み事を追加だ」

『よお、真理^{しんり}。一日で二回も連絡をよこすとは珍しいな』

朱鷺沼が話すと、それに応えるように機器が震えた。

声は壮年男性のものであり、低くありながらも朗らかな声だった。強弱をつけたり時々静かだったり機器はまるで生きているようにも見える。

壮年男性の言うことは無視して朱鷺沼は要点だけを話すことにした。一々反応していたら会話が進まず何時までも停滞状態になることを知っているためだ。

「先ほど…と言っても今朝の話だが、その時に学園の編入先を決めていなかったからその…」

『神楽坂学園だろ？ もうすでに俺の方で必要な手続きは済んでいるよ。あとはお前が編入試験を受けて合格すれば終了だ』

「…ああそうだ。しかしお前が既に神楽坂学園に編入手続きをしているとはさすがだな…」

『ああ、そりゃあ陣馬市には神楽坂しか無かったからな』

「……………なんだと…？」

信じきれないといった様子で朱鷺沼は尋ねた。

『更に言えばお前がそこに到着する前にもう手続きは済んでいるよ』
そんな朱鷺沼の様子を一切気にすることなく、壮年の男は悪びれずに言った。

「…編入する学園は自分で決める、と言っていたのは？」

『あの時は忘れていたんだ。手続きが終わっていたのに気づいたのは連絡した後だったからかな。いや、歳は取りたくないもんだ』

「歳を取りたくなければささとくたばれ耄碌^{もろく}老人が、何時までも四十二でいられるぞ。まあ骨と肉と血の塊になるがな」

怒りを堪えている為静かではあるが言葉の端々には殺意がはみ出していた。というより殺意しか含まれていなかった。

それもそうだろう、彼・朱鷺沼も陽菜子に負けず劣らずの真面目な男であり、探せと言われれば街全体を歩き回って下調べをし、頭を全回転させて短期間で決めるほどだ。

加えてこの壮年男性から早期の解決を頼まれているため、そんなことに時間を割けるのはこの日だけだったのだ。

それを見事に『意味なし』と遠まわしに言われたのだ。並みの人間なら怒っても仕方のないことだろう。

『歳を言うな、歳を。ただでさえ厄年だというのに加えて独身だからな…どこかに結婚相手は居ないか？』

「性別を問わなければいくらでも紹介できるが？」

『すまん、女性オンリーで頼む』

「元女性と心だけは女性。どっちが好みだ？」

『体が女性、でよろしく頼む』

「なら諦めるクソジジイ、その選択肢はそもそも存在しない…言うことも言ったからもう切るぞ」

それだけ言い朱鷺沼が機器の真ん中のボタンを押すと、先程までほぼ絶え間なく震えていた機器はウンともスンとも言わなくなった。その静かになった電話を黙ってしばらく見つめる。

「
…女性好きと忘却癖がなければなあ…」
朱鷺沼は諦めがちに息を吐きながら静かにつぶやいた。

血潮編 其ノ参

その夜から三日後。

朱鷺沼真理の姿は神楽坂学園の二年D組にあった。

サイズが大きい制服を身に着けているためか、手が袖によって完全に隠れてしまい、裾は足が隠れてしまうのではないかと思うほど長かった。

あまりにも珍しい神楽坂学園への編入生ということで、学園内には大きな話題を呼んだ。というのも神楽坂の編入試験は通常の入学試験に比べてはるかに難解であり、さらには合格点もかなり高めに設定されており、これまで一度たりとも編入に成功したものは居なかったからだ。

注目を集めるのも仕方のないことで、教壇の上で自己紹介をしている間、朱鷺沼はクラスのほぼ全員から奇異なものを見るような視線を注がれた。

「朱鷺沼真理まことです。須賀市から転校してきました。よろしく願います」

あまりに多く注がれる視線が嫌になってきたのか、早口で自己紹介を終わらせようとさらには空いている席に行こうとする朱鷺沼だったが、それも担任の一言によって阻まれた。

「それじゃあ、朱鷺沼はこれからお前たちと共に机を並べ勉学に励む友人になるから、何か個人的に聞きたいことはあるか？」

これによって朱鷺沼は止まらざるを得なくなり、許可が出ると同時にクラスは男女問わずに手を挙げ質問をぶつけようとしてきた。

「編入試験ってすごく難しいって聞いていたけど、どうだった!？」

「制限時間を目一杯使って全問に答えることができました。自分でも合格したのが不思議なくらいです」

「何か部活に入る予定は？」

「今のところは決まっていませんが、家の方でやらなければいけな

いことがあるので多分参加はほとんどできません」

「彼女は？」

「いない歴〃年齢です。少し寂しいです」

「スリーサイズは？」

「上から72・60・75…ってこれ誰が得する情報ですか？」

律儀に答える朱鷺沼に対する質問会は徐々にヒートアップして行き、いつの間にか周囲には蟻一匹這い出る隙間すらないのではないかと思うほどに囲まれていた。

さすがのこの状況は腕っ節に自信のありそうな担任ですら諦めたのか、男教師（長田）は窓際でお手上げのポーズをしていた。

時計を見ると授業の開始まではまだ十五分以上あり、それまでずっとこの状態かと朱鷺沼が覚悟を決めたその時だった。

「皆、朱鷺沼君も困っているからここで一旦彼を席に着かせてあげてください」

よく通る高い声が響いた。

朱鷺沼の横にいつのまに來たのか、そこには坂井陽菜子の姿があった。

朱鷺沼とあった時とは異なり大分調子を取り戻しているようで、柔らかでありつつも凜とした雰囲気をもっていた。

「え〜？ これで終わり〜？ もっと聞きたいことがあったのに…」

「一気に聞かないようにしてもらっただけです。順番に一人ずつ、決まった時間までであれば親睦を深めるという意味でも問題はありません。全員一旦席に戻ってください」

さすがは生徒会長と言うべきだろうか、先程まで暴徒となりかけて押しかけていたクラスメイトは全員離れ、今度は話す順番を決めるためのジャンケンで騒がしくなり始めた。

その間に朱鷺沼は陽菜子の先導についていき、先ほど空いていた席へと着くことができた。精神的な負担はやはりあったのだろう、朱鷺沼はようやく一息つくことができたようで全身の力を抜いて天井を見上げた。

「すみません、何しろ編入生は学園でも初めての事なので皆珍しがつて…悪気はないのですが…」

その様子が気になったのか、陽菜子は少し申し訳なさそうに謝った。

「ああ、大丈夫ですよ。少し驚きましたけど、楽しい人たちですね」「時々暴走することが玉に瑕ですけどね」

「そうみたいです」

意見が一致したことが面白かったのか、二人は同時に小さく笑った。

「それでは改めて自己紹介を。神楽坂学園現生徒会長・坂井陽菜子です。この学園について分からないことがあれば遠慮なく尋ねてください」

「わかりました。…坂井会長と言ったほうが良いですか？」

「どちらでも構いませんが…個人的に会長は無しの方が嬉しいです。ね。会長と呼ばれるととてもよそよしく感じられてしまうので…」
「じゃあ、坂井さんで…」で、突然ですけど、編入生ってそんなに珍しいものなんですか？」

この教室…いや、この学園に入った時から朱鷺沼は周囲からの異様な視線を感じており、すれ違う人全員に話題にされていたのも知っている。

悪口ではないので怒る理由もないが、やはりあまり気分の良いものではなかったらしく、朱鷺沼は少し顔をしかめていた。

「それは仕方がないですね。実を言うと、編入試験は以前は都内でも指折りの進学校に通っていた生徒が受けても合格できなかったほどだったのです…」

「えっと…その人は多分進学校の中では下の方だったのでは…？」

「そうならよかったんですが、残念ながら学内でトップレベルの人だった、ということを生方から聞きました」

「……………」

ようやく自分のしたことの大きさを理解したのか、朱鷺沼は額を

押さえて天井を仰いだ。

「…なるほど、それなら自分がこれほどまでに注目されてしまうのも仕方がないですね」

「一応この場合は凌ぎましたが、休み時間はないと思ったほうがいいですね。大分順番が決まったみたいで…ほら、最初の質問者ですよ。そう言って陽菜子が体をずらすと何時の間にいたのだろうか、シヨートカットの女子がいた。その女子は陽菜子が退くと同時に身を乗り出してきた。

「ねえねえ、朱鷺沼くんって須賀市の方から来たって言っていたよね？」

見た目通りの元気な女子のようで、少したじろいだ朱鷺沼をきにする事なく質問してきた。

「は、はい」

「実は私、有名な場所は結構行ったことがあるんだけど、出雲と須賀だけは行ったことがないんだよね〜！それで朱鷺沼くんに聞きたいんだけど、須賀ってどんな所？」

「えっと…とにかく緑が多い街ですね。駅から降りると目の前に森があるくらい木に囲まれていますよ」

「へ〜！っていうことは須賀って田舎になるの？」

「そうでもないですね。都市部として発展している場所もありますよ。けど隣の家まで数キロもあるような場所もありますから…」

「ふーん、面白そうだな〜いつか行ってみたいな〜！」

情報を加えると、彼女の言っていた出雲は神の國といわれる日本でも有数の神聖な地区であり、以前は観光地としてもその名を轟かせていた。

しかし三年ほど前に、突如政府から『第一種特殊立入禁止区域』に指定され、一般人が入ることは容易ではなくなった。彼女が訪れたくても行けない理由はそこにあった。

公に知らされている原因は『汚染物質の拡散防止』だが、如何せん説明が不足しすぎていたため納得の出来ない一部の人間は度々デ

モなどの反対運動を行なっている。しかしその甲斐虚しく、開放の提案…すなわち民意は一度たりとも通ることはなかった。

「はい、では森口さんはここまでです。次の人、どうぞ」

陽菜子がそう言うのと森口と呼ばれた少女は大人しく下がり、入れ替わりで体つきのよい男子が現れた。

彼の後ろを見ればかなりの列ができており、クラスメイト全員が並んでいるようだった。

「朱鷺沼君、あと二十九人です。頑張ってくださいね」

「……………ははは……」

陽菜子の激励に対して朱鷺沼は乾いた笑い声しか出せなかった。

「会長のクラスに初めての編入生が来たって本当ですか？ 確か名前は…朱鷺沼真理でしたよね？」

午前の授業も終わり、陽菜子は生徒会役員と共に昼食をとっていると、庶務の女子が興味津津の様子で話しかけてきた。やはり学園全体で話題になっていたのか、彼女がそう切り出すとほかの役員も箸の動きを緩めた。

「そうです！ 私のクラスでも話題になっていて…どんな人なんですか？」

推薦を決めて生徒会業務を手伝っている三年も気になっていたのだろう、もしくは話題が少なくなる時期だからこそこのような話に興味をもっているのかもしれない。

「そうですね…非常に大人しい男子ですね」

「格好イイ系ですか？ それとも可愛い系ですか？」

「背が小さくて眼鏡で…どちらかと言えば可愛いの方でしょうか？」

「あー！ 何かすごく見なくなってきた！」

女子にそのような話題はやはりつきものなのだろうか、その場にいた役員女子は陽菜子の話を聞くと互いに手を取って黄色い声を上げていた。

男子の方は少し気に入らないのだろうか、不満そうな顔をしてい

るが静かに耐えて女子のテンションに無理やり合わせていた。努力の甲斐虚しく誰もそのことに気づいていないが…

「でもこの時期に編入なんて珍しいですね」

「そうだよな。大きな行事はみんな終わっちゃったし、あとは終業式を待つだけだからね」

「親の引越しに着いてきたからだそうですよ。それなら仕方がないと思いますけど…」

「あれ？ 朱鷺沼君の質問会でそんな答えあったっけ？」

陽菜子と同じクラスで最初に質問した森口がごく自然にそう言った。当然、それを聞き逃すほど女子の耳は甘くなく、一瞬のうちに様々な邪推でもしたのだろう、悪戯を企んでいる子供のような表情をしながら陽菜子を中心に輪を作り逃げ場をなくした。

同じ女子でありながらもその女子同士の連携の良さに驚きながらも陽菜子は後悔していた。余計なことを言ってしまった、と。

「会長、朱鷺沼君と個人的に話でもしたんですか？」

「サッカー部のエースに告白されても見事に断った会長は可愛い派ですか？」

矢継ぎはやに投げかけられる質問にどう答えてよいか分からず、陽菜子は唸った。変に否定しても逆に怪しみ勝手に想像され、適当に肯定すれば情報はすぐに学園全体に拡散されてしまうだろう。逃げ場がほとんどないと陽菜子 thought とき、ちょうどドアが開き誰かが入ってきた様子だった。

「…相談者でしょうか？」

これは抜け出すチャンスと思つて輪を半ば強引に抜け出したが、そこに居たのは今まさに話題に上がっている朱鷺沼真理だった。

「あの…生徒会室はここで大丈夫ですか？」

自信が無さそうに訪ねてくる様子で役員たちは彼が話題の朱鷺沼だということを理解したのだろう、標的を一瞬のうちに陽菜子から朱鷺沼へと変え、さきほど見せた以上の連携でドアを体で封鎖した。最初、朱鷺沼は何故逃げ場をふさがれるのかわからなかったが、

女子の表情を見ると何となく合点がいったような顔をした。

「えっと…僕に何か…？」

覚悟した様子で朱鷺沼がそういうと、女子たちは待っていましたと言わんばかりに怒涛の質問攻めをした。

「さつき会長が朱鷺沼君の事を詳しく知っていたようだけど、何があつたの？」

「一昨々日道に迷っているところを案内してくれただけです。多分善意だけで声をかけてくれたんだと…」

「まあ、会長ならありえそうな話だね…」

「それじゃあその時はどんなことを話したの？」

「駅周辺の案内だけで、それ以外大した話は…」

「…ってあれ？ 君つてもしかして駅前で会長と口論していた男子？」

輪から少し外れた場所にいた…正確にはあまりにも密集していたためはじき出された女子の一人が思い至ったように突如大きな声を上げてそう言った。

「駅前で口論って…あの痴話喧嘩？」

「そういえば…いつの間にかいなくなっていたあの子かな？」

囲っている女子たちの興味を引くには十分すぎる威力だったのか、輪は声を上げた女子を通すように道を開けた。一瞬朱鷺沼はそこから逃げ出そうと考えたが、残念なことに開いた方向は窓に向かっており、ドアとは正反対の方向だったので仕方なく諦めた。

近寄ってきた女子は、朱鷺沼にゆっくりと顔を近づけ確認するようにまじまじと見た。

さすがの近さに後退しようとしたが、後ろから三人に肩を掴まれ不可能になった。

しばらくすると記憶の中の情報と目の前の男子の顔が一致したのか、女子は再び大きな声を上げた。

「やっぱりそうだ！ 一昨日駅前にいた子だ！」

「そうなのか！？ 会長と一体どんな話を…？」

さすがに男子も気になり始めたのか、控えめながらも女子の輪に加わり始めた。

「ちょ、ちよつと用事を先に言わせてください！ 質問はそれから答えるので…」

我慢も限界に來たのか、半ば怒り気味に朱鷺沼が吼えた。やりすぎたと思つた役員たちはまだ冷めない興奮を抑えながらも輪を崩した。

ようやく朱鷺沼がこの生徒会室に入ってから陽菜子に話しかけることができるようになった。朱鷺沼は真つ直ぐに陽菜子の前へと向かった。

「…お疲れ様。私が変なことを言つたから」

「いえ、第五回質問返答会が開かれたと考えれば…いや、やっぱり疲れました」

その言葉に偽りは無いようで、朱鷺沼は深く嘆息した。合計回数から休み時間も返上して質問に答えていたようだった。

「まあそれは良いとして…すみません。坂井さんに一つ頼みたいことが…」

「なんですか？ 私で出来ることなら…」

「大したことではありません。また街案内をお願いしたいと思つて、至極単純な頼みだった。当然陽菜子には断る理由もないので、快く領いた。

「それだつたら大丈夫ですよ。ただ、生徒会業務も終わらせなければならぬので、放課後少し遅れますが良いですか？」

「ありがとうございます。では、放課後教室で待っているのです。よろしくお願いします」

それだけ言つと朱鷺沼は静かに生徒会室から出ていった。

話題の種が無くなつたため、一瞬静かになつたが、女子の一人が気がついた。

「朱鷺沼君、まだ質問に答えてもらつてないや！」

自然な流れで逃げ出した朱鷺沼を追跡するために、女子たちはは

したないと分かっているながらも急いで弁当を食べ終え廊下へと走り出た。

陽菜子はこれ以上巻き込まれないために関与せず、生徒会室に残った男子とゆっくり昼休みが終わるまで談笑していた。

その後、陽菜子がクラスに戻るとさらに疲れ果て机に突っ伏していた朱鷺沼がいた。息も絶え絶えながら無事逃げ切ったようで、チャームがなると同時にようやく朱鷺沼を見つけた女子たちは悔しそうに嘆いていた。

放課後。

予想以上に業務が長引いてしまったため、陽菜子が教室に向かうことができたのは空が大分藍色に染まり始めた時間だった。大半の生徒は下校済みで、いつもは生徒が雑談したりしている廊下は不気味なほどに静かだった。

普段はかき消される足音も、人がいないために反響し、良く響き、陽菜子はその音から逃れるように歩くスピードを速めた。

(…これだけ待たせていたら、朱鷺沼君は帰っていてもおかしくないですね…)

窓から見える歩道をみると、街灯がコンクリートの道を照らし出していた。

ふと一瞬、六日前に遭遇した出来事が頭をよぎった。

忘れたと思っていたのに、なぜか鮮明に映し出された光景は、陽菜子の心を揺さぶるには充分だった。

(……ようやく落ち着いてきたというのに…何故?)

足も、手も、体も、自分のものではなくなったように小刻みに震え始めた。

直ぐに帰って休まないといけないと思ったが、何も言わずに帰るのも失礼だと思って震える体に鞭を打ちながら再びゆっくりと教室に向けて歩き出す。

(少なくとも今日案内することは難しいことだけを伝えましょう…)

考えているうちに陽菜子はクラスの前に辿り着いた。

明かりが消えており、一瞬朱鷺沼が帰ったと思ったが、わずかに月光に照らし出されて影がドアの窓に写っていた。

待たせて申し訳なかったと思いながら陽菜子がドアを開けると……
「大分遅かったな。待ちくたびれて話を聞かずに調査に出ようとしかけたぞ」

今までに聞いたことがないほど冷酷な声で、耳にした瞬間陽菜子は背筋が凍るような恐怖に襲われた。

人影の方に視線を移すと、たしかにそこには朱鷺沼真理がいた。
ただし、最後に見たその姿とは全く異なっていたが。

袖と裾があまりに余っていた制服はサイズがピッタリとあっており、可愛らしかった様子は微塵もなく、腕を組んで窓縁に腰をかけており、月に照らし出されたそのシルエットが陽菜子の脳内に深く印象付けた。

陽菜子が教室に入るのを目だけで確認すると朱鷺沼らしき男は床に足を付けゆつくりと立ち上がった。

「一応この姿では初めまして、だな」

陽菜子の驚愕をよそに、男は淡々と自分のペースで話を進めていく。

「討魔師代理・朱鷺沼真理^{しんり}。以後よろしく頼む」

笑顔もなく、ただ冷酷に、朱鷺沼らしき男はそう言った。

「……………討魔師？」

聞き慣れない単語を耳にした陽菜子は、警戒心を一層強めながらも男に問いかけた。

「そうだ。といっても今は本職から頼まれて代理に仕事をこなすだけだな」

「……あなたは、本当に朱鷺沼君なのですか？」

「……まあ、いきなり別人になっているのを見れば警戒心を強めるのは当然か……」

失敗した、と言わんばかりに頭を押さえて男は天井を見上げた。

「仕方ない。とりあえず論より証拠だな」

それだけ言うと男は顔を強く掴んだ。

すると一瞬だけ顔がつぶれ、同時に体が縮んでいった。

あつという間に袖も裾もあり、離して下ろした手は完全に袖に隠れてしまった。

「これで信用してくれますか？」

そこには最後に見た朱鷺沼真理^{まこと}がいた。

一瞬たりとも陽菜子は目を離していない上に瞬きすらしていないので、入れ替わりなどでは断じてない。

声音は冷酷な先ほどとは違って、今日一日談笑していた時の朱鷺沼そのものであり、陽菜子は認めたくないが、徐々に彼が異様な存在だということを認識していった。

しばらくすると再び朱鷺沼は顔に手をあて、体格を大の男のものに変えていた。

しかし、そんな彼女が彼に対して抱く感情は当然、恐怖。

先日遭遇した化け物を思い出し、自身が食われる幻想が浮かび上がってきたのだ。

教室に入る前に感じた恐怖はこれが原因だったのかもしれない。

ならば、あの時帰っておけば、と後悔だけが頭の中を占めていた。逃げ出そう、という発想が無駄だと思ってしまうほど、男との距離はちかすぎた。机などの障害物があるとはいえ、体つきの良さが服の上からでもよく分かり、逃げてみてもすぐに追いつかれると陽菜子は思ったのだ。

恐怖に震える様子を見て、朱鷺沼は納得がいったように再び失敗だと思つて天井を見上げた。

「ああ、なるほど。俺がお前をこの場で殺すかもしれない、と思つた訳だな。さすがに現場を見た人間に対しての配慮が足りなかったな」

男は顔の向きを戻すと、両手を頭の後ろで組み、いきなり背を向

けた。いわゆる無抵抗の意思表示である。

「…どういうことですか？」

意味は分かってもその真意が分からず、陽菜子は警戒心を緩めることなく尋ねた。

「敵意がないことの証明だが…まだ信用はしていないみたいだな」

「当然です。裏があると考えるのが普通です」

「…ならば攻撃してきても、俺は一切反撃しない。それでどうだ？」
そう言うとも男は手をそのままにして床にあぐらをかいて座った。

「……………」

もし、敵意がないように見せつけるための演技だとしたら、ここは一撃で気絶させられるほどの威力のある攻撃が良い。陽菜子は緊迫感から普段は絶対行わないような事を考えていた。

持ち物…には残念ながら辞書の類はなく、薄い教科書やノートしかないため、攻撃には不適當だろう。周囲を見回しても机に椅子しかなく、武器になりそうなものがない。

数秒考えると、そこでようやく陽菜子は最適なものがあることに気がついた。

「攻撃しないのか？　なら信用した、と…」

言いながら男が振り返ろうとすると、頭部にとてつもない衝撃が走った。

衝撃の勢いが余って窓際の壁にその長身を叩きつけられて、男は意識を失ったようにぐったりとした。

陽菜子が攻撃した物。それは机だった。

武器として扱うには重すぎるが、投擲すれば一度だけだが十分な威力を出すことができるものだ。

相手の能力が未知数であるため、これが最善の答えだと言うべきだろう。陽菜子が動かなくなった男を見て安心しようとしたその時…

「…いきなり机とは…俺じゃなければ死んでいてもおかしくないぞ…」

体の上に乗っていた、投げつけられた机を押しつけて男は平

然と立ち上がった。さすがに無傷というわけもなく、額には見事な切り傷が出来ていて、それを摩りながらつぶやいていた。

これ以上有効な攻撃手段も無くなり、逃げようにも起き上がってしまつては不可能だろうと、今度こそ諦めかけたとき…

「まあ、これで敵意のないことは分かつてもらえたか？」

別段気にする様子もなく、男は投げつけられた机を元の位置に戻し、教室中央に置いてある席に腰掛けた。

「今回は、お前が出会つた化け物退治に来た。そのために情報提供を頼みたい」

男… 朱鷺沼は静かに、そう言った。

血潮編 其ノ四

「まずいくつか質問しても良いでしょうか？」

「答えられる範囲であれば」

陽菜子の警戒心は完全に解けなかったが、それでも今のよう隣り合って話をしているところを見るとある程度緩めていることは分かるだろう。朱鷺沼はようやくスタートラインに立つことができたような状態だが、大した感動もない様子で陽菜子の質問に答える。

現在、神楽坂学園の校舎から既に離れており、商店街の入口へと差し掛かっていた。

雑踏で声がかき消されるのではないかと思っていたが、予想とは異なり陽菜子の耳には朱鷺沼の言葉が一音一音鮮明に聞くことができた。

「…討魔師、というのは一体？」

「要は害ある『怪異』…化け物を排除する仕事を受け持つ人間の総称だ。と言っても俺はさつきも言った通り、頼まれてここに来ているだけだが…」

「頼まれた…というのは？」

「事前調査…と言えば良いのか？ 簡単に言うと、このあと本職がこの街にやってくるはずなんだが、それまでに討伐がスムーズに進むよう情報を収集することが今回の役目だな」

「…それではあなたは？」

「本職の力は持っていないな。素質もないが、身体能力を評価されて個人的に雇われている状態だ」

言いながらも朱鷺沼は周囲へ常に注意を払っており、何か気づいたことがあると逐一手の平に収まるサイズの手帳に何かをメモしていた。

何を書いているか陽菜子は気になったが、残念ながら身長差があるため、覗き込もうにも視線が全く届かないので仕方なく諦めた。

「でも…さきほど見せたあの変装―いえ、あそこまで行くと既に変身の域ですね―は討魔師の能力ではないのですか？」

「……体質だ。潜入調査にはもってこいだと言われて使っているだけで、それ以上でもそれ以下でもない」

そんな風に話しているうちに、朱鷺沼は陽菜子と最初に出会った路地裏への入口で足を止めた。

陽菜子はゆっくり狭い道を挟んでいる建物を見上げると、電気が一切点いておらず、看板もいつから放置しているのか、所々に罅が入り長年放置されていた空ビルだということに初めて気がついた。

化け物に遭遇した時は、駆けつけようとした時も、化け物から逃げ切った時も急いでいたので気にする暇もなかった。

そこで陽菜子は、あの化け物がこの男に何らかの関係があるのではないか、と思い始めた。

「…私の出会った化け物について、何か心当たりがあるんですか？」
陽菜子は先程から気になっていた事を、意を決して尋ねることにした。

僅かに震えているところを見ると、恐怖は拭いきれていないのだろうが、それでも知らずに正体不明に怯え続けるよりは良いと判断したのかもしれない。

「…それを見極めるために、お前から話を聞こうとしているのだが…」

少し呆れたように息を吐いたが、すぐに視線を戻して話し始めた。
「今のところ分かっていることは、この化け物はまだ完全に『怪異』になりきっていない、ということだけだ。一応怪異を探索する手段もあるが、それに引っかけからなかったのはそれが原因だここにきてようやく分かった…」

言いながら裏路地から体の向きを変えて駅の方へと朱鷺沼は歩き始めた。陽菜子も慌ててそれを追うように歩き始めた。

「それには何か理由があるのですか？」

「実をいえば成りきれない原因は腐るほどあるが…今は主な原因だ

けでも話しておこうか」

言いながら手にもっているメモ帳を捲り、しばらくページを探し、目的のページが見つかったのか、それを陽菜子の目前に見えるように持ってきた。

「一つ目は怪異になりえる媒体が思念を十分に蓄積仕切れていないことだ」

「思念？」

「そうだ。怪異には自然発生…つまり誕生の原点不明のものと、媒体を元に形成されるものが主流だ。妖刀村正位は聞いたことがあるだろう？」

朱鷺沼の問いかけに、陽菜子は静かに頷いた。

妖刀村正は時の將軍家徳川が忌避した刀であり、徳川家に様々な災いをもたらしたとされる伝説はある程度国史に興味があれば大半の人間は知っているであろう。

「媒体を刀にして悪意が蓄積されたものが妖刀村正だ。一部の歴史書には作り話として扱われているが、実在した怪異だ。被害は…記述以上に甚大だったらしいが…」

「悪意が蓄積…というのは、人の悪意が怪異を生み出している、ということですか？」

少し気になったのだろうか、陽菜子は躊躇いがちではあるが朱鷺沼に尋ねた。

その回答に頷きながら朱鷺沼は話を続けた。

「正解だ。話が早くて助かる。妖刀も徳川家に支配された、もしくは滅ばされた豪族の怨念が一刀に募ったがために生まれたものだと言われている。日本全国を支配する上では大きな犠牲があったから、当然といえば当然だが…」

言いながら朱鷺沼はメモ帳の次のページを開く。

そこには『媒体型怪異・種類』と見出しらしきものが書かれており、三種類の絵が書かれていた。画心のなさに陽菜子は頬を引き攣らせたが、幸い朱鷺沼には気づかれなかったようだ。

「これにもいくつか種類があつて、意思を持ち自律行動をするもの、持ち主に憑依して殺戮を行うもの…例外的ではあるが中には自らの意志をもつて人間に力を貸したものもあるな…」

朱鷺沼はゆつくりとそのうちの一つを指差し、静かに口を開いた。
「今予想できる化け物は自律行動可能型だが…それだと少しおかしな話になるんだ」

「…おかしい？」

一応の理解はできているが、陽菜子にとっては創造の世界だと言われても不思議ではない話なので、朱鷺沼がおかしいと言えば全てが全ておかしく見え始めた。

「…説明が足りなかったな。これらは全て『怪異』になっていることが大前提、だと言えば理解できるか？」

その言葉でようやく合点がいった。

「…まだ怪異になつていないのに、動き回っている事ですか？」

陽菜子の返答が正解だったらしく、朱鷺沼は再び頷いた。

「怪異であれば探索法に引つかかるはずだが、該当せず。怪異に成る前だと仮定して気配を探ってみても一箇所にとどまっていない…討魔師としては前例のない事態に少し困っていたところだった。このままでは更に被害が出る…指をくわえて眺めているわけにもいかないからな…」

陽菜子に見せていたメモ帳を懐のポケットにしまつて、姿勢を正した。やはり背の高さが露骨に現れ、陽菜子より頭一つ半高いことがここにきてようやく分かった。

その高背が急に陽菜子へと顔を向けてきたので、思わず悲鳴を上げそうになったがかううじて堪えることができた。

「その化け物に接触したお前から話を聞こうと思つて神楽坂学園に無理矢理ではあるが編入してきたというわけだ…これだけ話せば情報提供を頼めるか？」

その表情は真剣そのもので、陽菜子には断る理由がなかった。
早期に解決しなければ、あの時見たような被害者が更に現れる…

いや、もうすでに更なる被害は、彼女の知らないところで出ているのかもしれない。

自分が直接関与することはできないが、それでも何もしないよりは良いと判断したのか、陽菜子はその時の事を可能な限り詳しく話した。

化け物と出会った状況、姿形、様子など思いつく限り話しているといつの間にか坂井と書かれた表札のある家の前にまで来ていた。

つまり陽菜子の家にまで辿りついたのだ。

「それでは今日はこれで…」

と、陽菜子が別れの挨拶をしようとしたが、そこには既に朱鷺沼の姿はなかった。どこに行ったかと辺りを見回してみると、迷うことなく玄関口にまで歩いていく朱鷺沼の姿が見えた。

「ちょ、ちょっと！ どうして家にはいるうとしているのですか！」

慌てて駆け寄り外に出そうと思っただけ、肩をつかんで引つ張ったが、体格差が顕著に表れたと言うべきか、朱鷺沼は微動だにせずその場に静かに立っていた。

「どうして…と言われても…お前がその例の化け物に魅入られたから、喰われるのを防ぐためだが？」

「……………え？」

「大抵の怪異は人に見られることを嫌って、表には出ないのだが…今回の場合のように意図せず見つかった場合などは、見た人間を殺しに来る事がある。そして話を聞いたところ、その化け物は人を喰らって成長しているかもしれないな」

その言葉に再び恐怖がよみがえってきた。

あの醜悪な化け物が自分を喰らいに来ている…そう想像すれば当然の反応だろう。無意識的に体の震えを抑えるように陽菜子は自分の体を強く抱いた。

「むしろ今まで良く無事だったと感心したいくらいだ。一人暮らしで最初に遭遇して以降一度も化け物と接触していないとは…奇跡としか言いようが無いな…」

家全体を眺めながら朱鷺沼は呟いた。

「ただ、その奇跡がいつまで続くかは全くわからない…もしかしたら今目を離れた瞬間に喰われるおそれも無いわけではないからな。今後は化け物退治が終わるまで俺もここを拠点とする。質問は…後にするか。とりあえず家の中で落ち着いてもらうしかなさそうだな」
朱鷺沼は鍵を何らかの物で開け、静かに潜まった坂井家へと二人は入っていった。

―同月十二日六時二三分・坂井陽菜子自室―

日も昇っていない時間帯に陽菜子は目が覚めた。

いつもより目覚める時間が早いことに驚いたが、寝た時間を考えれば当然かもしれない。家の前に着いた時間は七時頃で、そのまま眠れば早くに目が覚めるのも仕方がないことだろう。

服は制服のままだったので、皺になることが気がかりだったが、朱鷺沼も男なので着替えさせるわけにもいかなかったのだろうと納得する事にした。

体を起こすと体中に痛みが走ったようだが、近頃睡眠不足だった反動かもしれないと思って陽菜子は体を軽くほぐしてみると、今まで以上に体が軽くなった気持ちになった。

誰かが守っているという安心感からだろうか、原因は彼女自身でもわからなかったが、震えも治まり大分普段の調子を取り戻せたようだった。

陽菜子の部屋は二階にある…というより客間も含めた寝室が全て二階にあるので、そこに朱鷺沼もいると思って探してみるのが、客間・両親の部屋挙句の果てには物置も探してみたが、彼の姿は見えなかった。

どこに行ったのかと思いながら一階に降りると、香ばしい香りがした。

香りに誘われて台所に向かうと、昨日最後に見た姿で調理をする朱鷺沼の姿があった。

「…塩加減は…濃い方がいいのか、薄い方がいいのか…いや、最近の女子は健康にうるさいというから…よし、薄味でいこう」

ぶつくさと独り言を呟きながら目玉焼きとウインナーの炒め物を作っているようで、フライパンを両手に台所で戦っていた。

その様子に思わず陽菜子は笑ってしまい、耳に入っただのか朱鷺沼はフライパンから手を離さずに陽菜子の方へと顔を向けた。

「目が覚めたか？ 今朝食を作っているからもう少し待っている…と、勝手に冷蔵庫の材料を使わせてもらったが、大丈夫か？」

「あ、はい、大丈夫です」

言ったところで丁度レンジから焼き終わった合図が鳴り響き、朱鷺沼は素早く蓋を開けて中身を取り出し、事前に用意していた皿へとそれに乗せた。

トーストだった。

あまりにもスムーズな動作に陽菜子が驚いている間に、あつという間に朝食の準備が終わったようで、カウンターに出来たものを順々に並べていった。

「味は保証できないが…まあ体力を付けるには丁度いいだろう。先に食べていろ、少し道具を片付けてから俺も頂く」

言うが早いか、朱鷺沼はすぐに使った道具をお湯につけて、洗い始めた。

「御馳走様でした」

「お粗末様…で良かったよな？ 何しろ久しぶりだから忘れかけているんだが…」

食事が終わると同時に朱鷺沼は使用した食器をすべて片付けてダイニングへと再び腰をかけた。

「さて、昨日はお前が倒れたからそれ以上の話ができなかったが…他にも重要だと思っことを話しておこうと思う」

姿勢を正して正面に向き合う形になった。

しかし陽菜子は今朝朱鷺沼が寝室で寝た様子がなかったことが気

になり、尋ねると…

「ああ、単純な話、寝ていないだけだ」

「そんなことをして大丈夫なんですか？」

「その程度で倒れるほど軟な鍛え方はしていない。一週間不眠不休でも体調を崩すことはないぞ…それじゃあ、疑問が一つ解明されたなら話をするぞ」

そう言つて朱鷺沼は昨日使っていたメモ帳を取り出し、開いてテーブルの上に置いた。次のページが真っ白なことから説明するため昨日か今日の間に書いたというふうには想像できる。

「まず、俺がお前のガードをする理由だが…順に説明すると、お前が喰われることは化け物にとっては大きなプラス、討魔師にとっては大きなマイナスだからだ」

「…私にそんな特別な何かがあるとは思えないのですが…」

「そう思うのも不思議ではないが…そうだな、坂井は困っている人間を見かけたら迷わず助けるタイプだろう？」

「それは当然です」

「それがお前の狙われる原因だ」

開いたページを指さして朱鷺沼は続ける。

「怪異は思念を媒体に蓄積する…と昨日は言つたが、ここ五日間の調査とお前の話を統合すると、おそらくは人を喰うことによって怪異化が早まっていると想像できる」

「口封じ…とかの為ではないんですね？」

「今までの行動や聞いた話から奴にそんな知能があるとは到底思えないな。精々本能のままに人を喰つて人目から避けているようにしか思えない」

そう言つて朱鷺沼は『理由』と書かれた部分を指さした。

『1．食い散らかしている事から人を食つた証拠を隠そうという知恵はない様子』

『2．過去に犯罪などをしていた人間は食わずにただ殺しているだけだつた』

「そしてこれは普通の怪異にも該当することなんだが…これらの化け物は大抵『善人を喰らう』ことによって大幅に成長するんだ」

「…え？」

朱鷺沼の話した内容は、陽菜子を見事に黙らせた。

昨日は悪意などの怨念を蓄積することによって怪異になると言っていたので、話が違っていると陽菜子は思ったのだ。それを口に出す前に朱鷺沼は説明をする。

「たしかに昨日と言っていることが変わっているとは思うかもしれないが…そうだな、善人の血を透明度の高い良質かつ大量の物、悪意及び悪人を混じり物ばかりの少量粗悪品だと言えば良いか？」

そう言いながら朱鷺沼は空いている白いページに『怪異（赤）』と書き、その左には『善人（無色大量）』を、右には『悪意（少量）』と書き加えた。

それぞれの下に箱のようなものを書き、善人と悪意を共に同じ数だけの四角を用意した。ただし白黒のバランスが明らかにことなり、善人側は十ある内の九個が白、悪意側は十の内一個だけが白で残りが黒だった。

「例えば例の化け物が白を求めているとする。その時、人一人喰らうのに必要な労力を同じとした場合は、どれだけの馬鹿でも善人を選ぶだろう？」

「…そうですね」

「そしてここでは同じ数の四角を書いているが、実際は善人の方が何十倍と数が多い。これだけの条件がそろえば、化け物がお前を喰らおうとする理由も納得できるはずだ」

陽菜子は恐怖に震えながらも静かに頷いた。

「二つ目はこれを利用した…いわゆる釣り餌役になってもらう事で早期に発見できればなんとかなるかもしれない、ということだ」

「…やはりそんな考えもありましたか…」

最初の理由を聞いたときに何となく感じてはいたが、やはり実際に聞くと感じの良いものではないのか、陽菜子のため息を吐きなが

ら答えた。

要はわざと晒すことによって誘き寄せるという手段も有りうる、ということだ。彼女ほどの正義感がなければ、大抵の人間は真っ先に拒否するだろう。彼女がそれをしなかったのは、自身が危険に晒されることによって他の人への被害を少なくできるかもしれないと考えたからだった。

「ただそれはあくまで打つ手が無くなった時の最後の手段だ。わざわざ他の手があるときにまで使う手段ではないからな…」

そう言つてメモ帳を閉じて懷のポケットにしまった。説明に慣れているというべきか、陽菜子は焦りを一切見せない朱鷺沼の行動に何となく安心感を覚えていた。

「あと注意しておく事と言えば…外で行動する場合は可能な限り日の昇っているうちに済ませてくれ。怪異を含む化け物は基本人目に晒されることを極端に嫌うから、人通りが適度に多い場所を歩いてくれ。ただし多過ぎる場所は避けてくれ。一人二人が急に減つても気づかれない場所だと余計に危険だからな」

その後、いくつかの注意事項を聞かされている内に、陽菜子はいつも家を出る時間になったことに気がついた。

「あつ、そろそろ時間ですので学園に行きます」

「そうか？　しかし時間としては早すぎる気もしないではないが…」

「生徒会業務があるので、役員は基本早朝登校なんです」

「…成程」

納得がいったのか、朱鷺沼は少し考えたあと、ゆっくりと口を開いた。

「それなら俺はもう少し遅れて登校しよう。この時間なら一時間程度仮眠しても問題は無さそうだからな」

「…軟な鍛え方はしていないのでは？」

「確かにそうだが、だからといって眠らなくても大丈夫というわけではないぞ。とにかく少しでも体調を完全に整えておかなければ、いざという時に全力を出し切れないからな」

そう言いながら朱鷺沼はその長身をゆっくりと上げ、静かにリビングのソファで横になり、あっという間に寝息を立てて眠り始めてしまった。

その表情を陽菜子がのぞき込むと、先程までは考えられないほど気の抜けた寝顔だった。討魔師なんて物騒な生業をなしているような人間には到底見えなかった。

持ち込んだものは学園でも使っていた力バンのみで、あの怪物と戦うようなものは持っておらず、いざ襲われたときにはどのように対処するのか気になったが、不思議と不安にはならなかった。

何故か朱鷺沼は胸に嚴重に封をかけられた一冊の本を抱いていたが、表紙には文字一つ無いためなんの本であるかは陽菜子には全くわからなかった。

「…それでは、行ってきます」

静かに陽菜子がそういうと、朱鷺沼は無意識的に頷いた。

血潮編 其ノ伍

―同日十六時十二分・商店街―

朱鷺沼も陽菜子も学園での生活は特に大した問題もなく終えることができていた。途中生徒会役員女子の追送戦もあったが、朱鷺沼は少年状態の体の小ささを利用して様々な場所に隠れて、変な追求を一切されることなく放課後まで逃げ切ることができた。

現在朱鷺沼は単独で情報収集のために、駅周辺を散策していた。姿は当然というべきか、青年状態だった（少年状態では探偵ごっことされてまともに相手をされなかったため）。

身に纏っているものは学園の制服ではなく黒のスーツであり、朱鷺沼の長身にはよく似合っていた。

その格好で話しかけると店員は朱鷺沼を刑事か何かと勘違いしたのか、ようやくまともに取り合ってもらえるようになった。

朱鷺沼はその店員の様子から聞き方を少し変えてみようと考えた。「最近この周辺で人がなくなった事件について知っていることがあれば詳しくお聞きしたいのですが…お時間をとってもよろしいでしょうか？」

できる限り低姿勢で、ただし断りづらいように威圧感を交えて静かに尋ねることにした。

さすがに若い店員は慣れていない気迫に押されて思わず「はい」と言ってしまった。

「五日ほど前に空きビルが多い辺りの路地裏で、惨殺死体が発見されたことはご存知でしょうか？」

朱鷺沼が学園に向かう前に簡単ではあるが情報収集をしていると、全国紙では小さくではあるが取り上げられており、地域紙には細心の注意を払うよう大きく書かれていた事を確認しているので、日にちと大まかな内容を話すだけで店員は理解したように大きく首を振った。

「は、はい…あ、そ、それなら店長の方が知っているかもしれません！俺…いえ、自分はその日は休んでいたの…」

朱鷺沼の（無意識の）威圧感に緊張しながらも若い店員は答えた。その場から逃げ出したい、という雰囲気もありありと朱鷺沼に伝わっていたので、店の奥を見ながら話した。

「…そうですか。それではお取次ぎを願えるでしょうか？一週間前の事件解決のためにご協力お願いします、と…」

「わ、わかりました！」

そう言う若い店員は慌てて店の奥へと駆け出していった。プレッシャーに堪えきれなかったのか、僅かにふらついて、曲がり際に足をぶつけていた。

「…もう少し穏便な気配を出すように…は無理か…」

見た目相応の話し方だと自負していたようだが、若い店員の反応を見て朱鷺沼は反省していた。変えてみようと思いのなかで他の話し方を想像してみたが、どれも自分には合わない判断するときっぱりと諦めていた。

しばらく店の前で待機していると、先ほど走り去っていった若い店員が申し訳無さそうに現れた。

「…お話ができないと言われましたか？」

「い、いえ！話はできると言っていたんですが…！その、非常に言い難いんですが…」

若い店員は大通りの方へと目をやった。それを追うように朱鷺沼が視線を移すと、何事かと気になった客が店に入れない様子だった。「その…非常に目立つので裏口の方に回って欲しい、といわれたので…」

「…失礼しました。これは立派な営業妨害ですね…」

「申し訳ありません、店の横道から入ってくれば店長が待っていますので…」

「分かりました。ご協力に感謝いたします」

それだけ言い残すと朱鷺沼は堂々とした様子で裏道へと入ってい

った。

裏道は昼間だというのに薄暗く、本来人二人分ぐらいあるはずのスペースはポリバケツやゴミの入ったビニール袋が無造作に置かれているために非常に歩きづらい状態になっていた。

いくつかのゴミ壁を飛び越えると丁度十字路にさしかかり、朱鷺沼が左を見るとそこには先ほどの若い店員が着ていたような制服を身に纏った中年男性がいた。彼が先ほど若い店員の言っていた店長だろう。

店長は裏路地に入ってきた朱鷺沼に気が付いたようで、手を振りこちらだということをアピールした。幸い道が塞がれているなどのことは無かったので静かにたどり着くことができた。

「すいません、わざわざこんな場所にまで来ていただいてもらって……ただ、内容が内容だけに表で話すべきではないと思ひまして……」

「その配慮は妥当です。加えて、お時間を取らせてしまつて申し訳ありません。ご協力に感謝します」

「いえ、事件の解決をしてくれると言うのなら協力は惜しみませんよ。話を聞いてくれるとは思つてもいませんでしたので……」

店長は内心溜まつていたものをようやく吐き出せるといったような安心したような表情をした。その言葉に違和感を覚えた朱鷺沼は眉を顰めた。

「失礼ですが、話を聞いてくれるとは思わなかった……とはどういうことでしょうか？」

「いえ、実は警察が事件後に調査に来たのですが、特に聞き込み調査などをするわけでもなく、死体を片付けるだけで帰ってしまったので……ところで貴方は刑事さんでよろしいのですか？」

「……はい。本来管轄外の件ではありますが、解決していないということで独自に調べさせていただいています」

話を円滑に進めるための嘘ではあるが、決して全てが嘘というわけでもない。実際これらは本職の仕事でありながらも人員不足で、個人的な依頼で動いている。

それに、彼は彼自身の為に動いている、ということもある。

「それで、事件当日の事に関して詳しくお聞かせ願えますか？」

「はい…」

話を促すと、店長は何から話すべきか少し悩んだが、朱鷺沼が「ゆつくりで大丈夫です」というと、一つ深呼吸をした後静かに話し始めた。

「当日の五時位でしょうか…その時間にいつも店で出たゴミを一通り纏めるためにこの裏口にくるのですが、その時に何やら悲鳴が聞こえたんですよ…向こうの方からです…」

そう言って店長はゆつくりとその方向を指さした。確かにその方向は朱鷺沼も既に一度向かっており、惨劇の名残が忌々しく残っていたのは記憶に新しい。

「何かと思つてしばらく見つめていたんですけど…その後は静かだったので店に戻ろうとしたら、今度は呻き声みたいな声と、肉を叩きつけたような音が路地に響きわたったんですよ…そしたら…」

思い出したのか店長は体が僅かに震えていた。が、そこで話を止めずに続ける辺り、これだけは伝えなければいけない、というような使命感があるのかもしれない。

「…大きな化け物が…そこをゆつくりと歩いていました…思わず店の中に慌てて駆け込んで…ドアの隙間から覗いてみたら…」

鮮明に思い出してしまったのか、店長の顔は青白くなり、手足も震えているようで視線を下に向けてしまった。

「…その化け物の特徴を…覚えている限りで良いので聞かせていただけですか？」

朱鷺沼の反応は予想外だったのか、店長ははっと顔を上げ、朱鷺沼の顔を、目を見開きながら静かに尋ねてきた。

「こ、こんな話を信じてくれるんですか…？」

信用されないことを覚悟して話していたようで、店長の顔はどうか安堵の色が含まれていた。

「詳しい内容はお話出来ませんが、他にもそのような化け物らしき

モノを見た、という証言があるので、ご安心を。そして現在事件の原因はそれにある、と自分は考えていますので…」

そう言っていると店長は朱鷺沼の右手を両手で強く握りながら頭を下げた。

「ありがとうございます…！ これを話しても誰も信じてくれず…怖くて今まで眠ることもできないほどでした… 姿を見た自分が、いつか…襲われるんじゃないかと…」

最後の方は嗚咽も混じっており、どれだけの恐怖を一人で抱え込んできたのかがなんとなくだが朱鷺沼に感じられた。

陽菜子の場合同様に、知らない人間には夢物語にしか聞こえないだろう、故に誰もその恐怖を和らげるものが存在しないがために、一人怯えながら日々を過ごしていたのだろう。

「…早期解決のためにはその化け物の情報が必要不可欠です。お聞かせ願えますか？」

朱鷺沼はできる限り優しく尋ねると、店長は怖々と話し始めた。

「この店の丁度二階の窓くらいの大きさで…影だけだったのではつきりとはわかりませんが、首が無い様に見えました。歩くとびにビチャ…というような音を立てているのも覚えています…私に分かることはこれだけです」

店長が特徴を挙げると朱鷺沼はすぐにそれをメモに走り書きで残した。それもすぐに終わると、視線を店長に向けた。

「ありがとうございます。この情報も参考にして今後調査を進めていきたいと思います」

「役にたてたなら光栄です」

「ただ今後の生活には充分気を付けてください。日が落ちてからは路地裏に入るような仕事をしないでください。またいつどこでその化け物が現れるかわからないので」

「分かりました…いや、本当に平和だった街にこんな事件が起こるようになってしまったのでしょうか…？」

「自分は管轄外なので詳しいことは分かりませんが…何か境目、の

ようなことはありませんでしたか？」

折角なので他にも情報が無いかと朱鷺沼が話を広げると、店長は後ろ首を右手で押さえる、考えるような仕草をした。

「定かではないんですが…どうでしょう、都市開発が進んだ頃から…だったと思います。それまでは今回や今までみたいな事件は一度も起こらなかったんですが…」

「…失礼ですが、そのたびに同業は？」

「はい、ご想像のとおり、ある程度の現場検証をただけですぐに帰ってしまいました。当然、事情聴取もほとんどせずに、です」

「…ありがとうございます。先ほど話していただいた内容…特に警察の行動については全て他言無用でお願いします」

「？…分かりましたが、何か理由でも？」

「詳細を話すことはできませんが、少なくとも貴方の身の安全を確保するためです。ご理解いただければ幸いです」

「…分かりました。では私はまだ仕事があるので…」

真剣な表情で真理が言うと、店長は怯えた様子が一瞬見えたが、すぐに静かに頷いて背を向けた。

「ご協力ありがとうございます」

そう言って朱鷺沼は店長が店に入るまで深く頭を下げていた。

―同日同時刻・神楽坂学園体育館―

坂井陽菜子の姿がその中央にあった。

白い道着に身を包んで。

対峙しているのは体格のよい男子生徒で、陽菜子より頭一つ分大きく、道着から見える腕は丸太のように太かった。

周囲にはギャラリが集まり、皆興味津々な様子で二人を見ていた。

「それでは、お願いします！」

「お手柔らかに」

男子生徒が元気よく、勢い良く礼をするのに対し、陽菜子は静か

にゆっくり頭を下げた。

互いに頭を上げると同時に構えを取った。

男子生徒の構えは少々変わっており、両腕を地面に対して水平にした半身で利手である右手を顔の横に置き、左手は伸ばして視線の先に、というような物だった。

対して陽菜子の構えはごく普通の構えで、両手を前方に腰を低くするものだった。

数秒は互いに間合いを取りつつ、牽制を入れつつ前へ後ろへ、時には横へと動き様子を見計らっていた。

「セイ！」

先に動いたのは男子で、体のバネを使った鋭い上段蹴りを一切の容赦なく陽菜子の顔面へと見舞った。

予備動作が全くとっていいほど無く、素人が相手すれば恐らくこの一撃で沈んでいただろう。

しかし、陽菜子はこれを屈みつつ左腕でうまく受け流して反撃に出る。少しまともに受けてしまったが、痛みを訴えている暇はない。振りの大きい攻撃だったので、隙が生じると思って胴に向けて正拳突きをした。

だが男子は己の蹴りの勢いと、受け流された足を軸にして回し蹴りを放つ。

無理矢理、という形は否めないが、十分な二段構えの蹴りであり、陽菜子が想像していた隙は生じることがなく、仕方なく攻撃を避けるために後退せざるをえなかった。

空けた間合いはおよそ二メートル。

攻撃するためには互いに一步以上踏み込まなければならぬため、反応には十分な間合いを確保することができたが、やはり体格差によるリーチ差は陽菜子の方に若干の不利があるため、決して陽菜子にとっての良い状況になったとは言いがたい。

再び牽制のし合いとなる。

周囲の観客は先程の攻防が感動の余韻を残しているためか、徐々

にざわつき始めるが、試合中の二人は極度の集中状態に陥り、それらの音を一切気にする様子もなく互いに睨み合い続けていた。

数十秒ほどその状態が続いた頃だろうか、今度は陽菜子が先に動いた。

真っ直ぐにぶつかるとはではなく、岩野の背後を取るように右へと飛び、攻撃をするという手段だ。

「ハッ！」

岩野もそれを追う様に体を回すが、残念ながらここで体格の差が裏目に出てしまった。

その大きな体を素早く反転させることが、陽菜子の動きはそれを上回る速さで、迎撃の手を打とうとした時は既に陽菜子の拳が胴に当たる寸前にまで迫っていた。

避けようにも距離がほとんどないために間に合わず、岩野はほぼ条件反射で最も陽菜子に近い左腕で反撃に出る。

しかし無理な体の捻りから出した正拳に勢いが乗るはずもなく、先程の上段蹴りを受け流した陽菜子にとって避けることは容易だった。

岩野の攻撃をくぐり抜けるように避け、拳が顔の横を掠めても動じることなく前に進んだ。

拳が胴の真ん中に当たる寸前に二人は動きをピタリと止めた。

先程までの会場の騒々しさが嘘のように一瞬だけ静まり返った。

岩野は突き出した拳を引いて陽菜子から数歩分の間を取ると静かに言った。

「……………参りました」

その一言で、周囲の観客は突如ワツと盛り上がりを見せた。

冷めない熱が抑えきれなくなったのか、全員がそれぞれの感想を二人に向けて放った。

「さすが会長です！ 素敵です！」

「岩野も会長相手に良くやった！ この調子で大会も勝ち進めよ！」
次々に投げかけられる賞賛の言葉に対し、陽菜子は少し照れくさ

そつに、空手部大将の岩野は高々と拳を振り上げて『観客の期待に答える』という意思を示していた。

徐々にそれらの声も収まり、観客が去っていく中、岩野が陽菜子を呼び止めた。

「会長！」

ゆっくり振り返ると同時に、深々と頭を下げている岩野が目に入った。

「…何でしょうか？」

「今日はお忙しい中、わざわざ自分の組手にお付き合いただきありがとうございます！」

声は床に向かいながらもよく響き、岩野のいる体育館中央から陽菜子のいる出入口まで一音一音はつきり聞こえていた。

「どういたしまして。明日もその調子で頑張ってください！」

「はい！ありがとうございます！」

その言葉に応じるように、空手部一同も揃って頭を下げ陽菜子及び生徒会役員たちが体育館から出て行くのを見送った。

「大会…満足のいく結果が出るといいですね」

着替えを終わらせ、更衣室から出たところで隣を歩いていた役員女子に尋ねるように陽菜子は呟いた。当然彼女たちはこの言葉を聞き逃すはずも無く、楽しそうに答えた。

「大丈夫ですよ！ 岩野主将の動きも凄く切れていましたから！」

「でも相変わらず会長の試合は見蕩れてしまいます… 武術系の部活で会長に勝った人っていましたっけ？」

「今のところ一度も負けていない上に、今回の試合で全部活の主将・エースに勝ったことになるので…」

「…学園最強の生徒会長ですか… 格好イイですね！」

「アハハハ… それだとなんだか物騒な人に聞こえますね」

大会前最後に自分の实力を知りたい、ということと突如組手を申し込まれた陽菜子は一切の躊躇いなくそれに応じた。

これは陽菜子が学園内で独自に行なっている相談の一例であり、

何事にも真摯に向き合う陽菜子に生徒たちがそれぞれの悩みを相談しに来て、空いた時間を利用して行動するというものだった。

今回のように実践的な組手を申し込まれるようになったのは、最初に「試合で勝てない」と悩みを相談しにきた剣道部部員から始まり、その悩みを聞いた陽菜子が中学までに習った武術経験を活かして指導・組手をしたことからだった。

戦績は先程役員女子が述べたように全戦全勝。

その結果に周囲の女子は感動を抑えきれない様子で騒いでいたが、陽菜子は少し浮かない様子だった。

（でも…あの化け物相手には何もできなかった…）

少しだけ先週の事を思い出してしまったようで、陽菜子の手は僅かに震えていた。幸い周りにいる女子たちには気付かれていない様子だ。

（…朱鷺沼君はあんなものを相手にするのでしょうか…）

そして今まで一切たりとも知ることの無かった『討魔師』という存在。

今の陽菜子の様な賞賛を一度も受けることなく、人知れず化け物と戦っていたのかもしれない。

陽菜子は心半ばで話をし、途中駅で全員と別れてから家路へと着いた。

朱鷺沼の情報収集も滞りなく終わり、陽菜子の生徒会業務もその後の相談も早いうちに終わらせることができ、現在空は藍色に染まり始める、という時間だった。

坂井家の食卓では少し早い夕食が始まっていた。

「…えつと…これが今日の晩ご飯ですか？」

目の前に出されたものを見ながら、陽菜子は呟いた。

テーブルの上に出された物は、ネギだけが気持ち程度乗せられた素うどんだった。

「そうだ」

平然とした様子で、麺を静かにすすりながら朱鷺沼は頷いた。

「…朝食とは全く違って質素ですね。朝は豪華に、夕方は質素に、が朱鷺沼君の食生活なのですか？」

「いや、単に朝の料理で材料をほとんど使い切っただけだ」

「だとしたらその事をきちんと朝のうちに話してください！」

情報共有の大切さが切にわかった瞬間だった。

もし今朝のうちに話していれば帰り際の商店街である程度揃えることも出来たのに、と今更考えても仕方のない後悔をしていた。

そんな陽菜子の心情を一切感知せずに朱鷺沼は箸を進める。

黙々と。

モグモグと。

「冷蔵庫の中身ぐらいは把握していると思っていたから言わなかっただけだ。というよりこれも偶々あった小麦と塩で作ったんだ。労いを受けても批難を受ける道理は無いと思うぞ？」

話している間にも朱鷺沼は自分の分を全て食べてしまったようで、うどんの入っていた器には汁一滴も残っていなかった。

「さて、食べ終わった食器は水に浸けておいてくれれば勝手に洗っておくから、坂井は風呂にでも入ってこい。その間で俺はやるべきことをやらなくてはならないから…」

それだけ言々と陽菜子が戸惑う様子は一切無視してリビングのソファに座り、テーブルの上に二つのメモ帳とよくわからない機械を並べた。

「あ、朱鷺沼く…」

と、声をかけようとしたが、本能的に口を閉じてしまった。

朱鷺沼の身に纏う気迫が一気にふくれあがり、話しかけることも躊躇ってしまうほどその横顔は非道く真剣なものだった。

「……………」

伸ばしかけた手は行き場を失い、仕方なく用意された箸に移した。用意されたうどんは丁度良い温かさになっており、出汁の良く効いた汁が食欲を誘う。

「…いただきます…」

持ち上げて中身を見ると、その量は先ほど朱鷺沼が食べていた量を大分上回っており、陽菜子には最適の量だった。

食べ終わると同時に朱鷺沼も一段落したのか先ほどの緊迫した雰囲気を一気に和らげて深く息をついて、静かに立ち上がった。

「…丁度食べ終わったか、それじゃあ器は下げるぞ」

朱鷺沼は陽菜子の確認を待たずに器を下げて台所へと向かった。陽菜子は朱鷺沼が仕事（？）に集中している間に食器を洗ってしまったおうと考えていたため、完全に手が空いた状態になってしまった。

ゲストがホストをもてなす状況に、陽菜子は多少の居心地の悪さを感じていた。

何かないか、と部屋の中を見回していると、リビングのテーブルの上に朱鷺沼の本が一冊だけ片付けられずにいた。

今朝、朱鷺沼が仮眠をした際に大事そうに抱いていた、嚴重に封をされた本だった。

これだと思った陽菜子はすぐに席から立ち上がり、善意で片付けようとした。

「朱鷺沼君、この本はどこに…」

「それに触れるな！」

尋ねて返ってきたのは怒りを込めたような低く大きな声だった。

突然のことで陽菜子は触れようとしていた手を本能的に引っ込めた。

「え、あの…何か危ない物でしたか…？」

「…驚かせて悪かったな…ただ、それだけは誰かに触られるのが嫌で、つい…」

しばらく、食器を洗う水の音だけが坂井家に響いていた。

「…えっと…討魔師の重要な本ですか？」

「普通の日記だ…ごく、普通の、他愛の無い事ばかり書いてある、な」

日記だと言われた物を見ると、所々に傷が付き、側面から見える紙はかなり色褪せているのが分かる。

リビングに居難くなった陽菜子は、仕方なく風呂に入ること決め、静かにその場から立ち去った。

血潮編 其ノ陸

―零二時零分・住宅街上空―
草木も眠る丑三つ刻。

つい数時間前までは煌々と照らしていた街の明かりはほとんど消えて、大きな闇が住宅街を被っていた。

それは坂井家も例外ではなく、耳が痛いほどの静寂を纏っていた。そこを見つめる二つの影。

化け物ではなく、黒い装束を身に付けた極めて平凡な人間だった。屋根の上で屯する事を平凡だというふうに定義すれば、の話だが…吹き抜ける風によりはためく衣装の隙間から覗く腕は、常人以上に鍛え抜かれたものだということがよくわかるほど逞しく、それでいて無駄のない体つきだった。

『…目標の所在を確認。これより任務を遂行する』

『諒解』

背の高い、上司らしき男が小さく確認すると、後方に待機していた男が屈めていた体を静かに起こした。

『今回の任務内容は充分に理解しているな？』

『…目標を捕縛して、《アレ》に食わせる…以上。目標は現在両親不在の閑居中…簡単な仕事ですよ』

『正解だ。だが幾つか条件が抜けているな…傷を一切付けるな、気づかれないように慎重に…』

『慎重に…なんだって？』

部下の声でないと理解した男はすぐにその場を飛び退いた。

次の瞬間、強い衝撃により屋根は非道く揺れて、危うく体勢を崩しそうになった。

衝撃と同時に短い悲鳴が聞こえたので、声のした方向を見ると、部下が頭を押さえつけられていた光景が目に入った。

部下を押さえている者は、月光に照らし出されてその姿を露わに

していた。

赤い戦闘服に身を包んだ、討魔師代理・朱鷺沼真理だった。

「情報は何よりも鮮度が命だ。二日前の状態なら間違いなく成功していただろうが、昨日今日となれば話は全く別だ。俺の情報を得ていなかったことが不幸だったな」

『貴様…何時の間に!』

『く、クソ! 離せ!』

押さえつけられている男は、身動き一つ出来ないよう手足を抑えられているにも関わらず、抜け出そうと必死にもがいていた。

「…会話の邪魔だ。少し静かにしてもらうか…」

煩そうに朱鷺沼は男の両手両足の関節を素早く外し、悲鳴を挙げる前に延髄を打って気絶させた。どれも常人…いや、裏の道に精通している手練でも容易にできることではなく、真正面で見ている男は不覚にもその鮮やかさに目を奪われそうになった。

が、すぐに正気を取り戻して突如現れた朱鷺沼に怒りの箆った視線を向ける。

『…その鮮やかさ…一般のボディーパーガーだなんてちやちなものではなさそうだな…?』

「そんなことを言っているお前も、あれがよけられるとはただの盗撮者やストーカーなんかではなさそうだな。その物騒な物を持っている様子でも…な」

朱鷺沼は静かに立ち上がりながら男の腰を指さした。

男の腰には拘束用のレザーベルトに拳二つ分くらいの刀身を持つ無骨なナイフが備えられていた。少なくとも一切害を加えないようには見えない。

指摘されたことでもう隠す必要は無いと判断したのだろう、黒装束の男は静かに腰に差していたナイフを抜き払った。

空を切る音はとても澄んでおり、そこから繋がった構えも隙の少ない切っ先を朱鷺沼に向ける基本的な構えだった。

腰は低く、重心を前に傾け、体重を爪先に乗せる単純であるが故

に、どれだけ鍛えられたかが分かる基本的な構えだった。

対して朱鷺沼は半身で右手を下げ、左手の平を男に向ける迎撃の構え。

原因は当然後方にある坂井家への突撃を防ぐためだ。

『目敏いな。出来れば衝突は避けておきたいと思うのだが…』

「叶うのならそれが最善だろうな。だが化け物に捧げる人間を集めるような奴に譲る道は無いぞ？」

その一言で男の纏う気配が鋭くなった。

明らかな敵意と殺意。構えを更に深くした。

『貴様、何者だ？』

「討魔師代理・朱鷺沼真理」

名乗ると男は、思い至る事でもあったのか、視線を移すことなく納得したように頷いた。

『成程、それならばそのことにたどり着いたとしても不思議では無いな』

「知っているのならば話が早い。化け物の場所へと案内願おうか？こちらとしても無用な被害を出したくないからな」

『それは貴様か？それとも俺か？討魔師の人間への攻撃は禁止されているはずだろう？』

「貴様だな。残念だが俺は雇われで正式な討魔師ではないから、当然それらに関しては一切の禁止がされていない…これがどういうことか、わかるな？」

その言葉の意味をすぐに理解したのだろう、男は一步後ずさつて朱鷺沼との距離を稼ぐ。が、それもすぐに見抜かれ、二人は同時に地を蹴った。

男は下がったと見せかけて一気に朱鷺沼の懷に潜り込み、ナイフを横一線に凧いだ。常人ならば、何が起こったか感知することすらできないだろう速さだった。

が、朱鷺沼は常人ではない。

ぶつかると見せかけてナイフが振られる瞬間に半歩下がることに

よってナイフの軌道から紙一重で避けていたのだった。

手応えを感じないことに、危険を察知した男は追撃を中止し、防御に転ずる事にした。

降り抜こうとされる掌底を防ごうと、両手で壁を作った。

「一手！」

が、その防壁は虚しく敗れ、衝撃をほとんど緩衝することなく、男の顔面に直撃した。

『ゴハッ！』

男の体はそれによって紙くずのように吹き飛んだ。

勢い余って屋根から落ちそうになるのを、運良くへりを掴むことによって避けることができた。

だが、当然その好機を朱鷺沼が見逃すはずもなく、速攻で駆け寄る。

『ちっ！』

普通によじ登っていても追撃を受けてしまう。そこで男はその状態のまま壁を蹴り、その反動を利用して隣家へと飛び移った。何とか成功し、体勢も直すことができていた。

見れば先ほど男のいた場所には丁度朱鷺沼が蹴りを放ったところだった。

判断が一つ遅れていれば、朱鷺沼の追撃の嵐だっただろう。

道路を挟み、再び朱鷺沼と男は対峙する。

黒装束の男は敵わないと判断したのだろう、朱鷺沼が構えを変えた一瞬の隙を突いて一気に逃げ出した。

「…逃がすか！」

相手の行動をある程度予想していたのか、朱鷺沼は迷うことなく追走へと踏み切った。

朱鷺沼と黒。

二つの影は光の灯る街へと向かって駆け始めた。

黒装束の男は焦りを感じながらも屋根を伝って彼の本拠地へと向

かっていた。

本来なら想定外の事態に遭遇しても、ある程度対処できるように最低でも二人一組で行動するように義務付けられていたのだが、肝心の相棒：部下が一瞬のうちに使い物にならなくなり、単独で能力が未知数の敵を相手にしなければならなくなったのだ。彼の焦りも至極当然のものだろう。

非常に厳しい訓練を乗り越えた者のみが入隊を許可される「夜鴉」：情報収集や暗殺術、誘拐などの隠密業を専門とするため、必須である機動力は死にもものぐるいで鍛え上げ、隊の中でも指折りの実力もあつた。表舞台に出ることがあれば、間違いなく世界の記録全てを塗り替えられる自信もあつた。

だがその自信も、今この瞬間によって見事に打ち砕かれた。

後方には朱鷺沼が、一定の距離を保って付いてきているためだ。

全力疾走しているにも関わらず、だ。

こちらは息も徐々に上がり始めているが、向こうは何一つ乱すことなく、悠々と追跡をしている。振り切れる様子が全くないことが、更に黒装束を焦らせた。

おそらくは先の宣言通り、化け物の場所に向かうまであくまで追跡に徹する、ということだろう。その余裕を見せつけられるようで、怒りを覚えたが、同時にそれに対して何もできない自分に対してもどかしさを感じていた。

（畜生：向かつても勝てない、逃げても振り切れない…そのような相手にどう対処すれば良いのだ…！？）

今まで一度たりとも遭遇したことのないような場面に立たされたことで、黒装束はひたすら内心で毒づいていた。

先ほど受けた一撃だけで、二人でなければ勝てない相手だと…いや、仮に二人掛かりでも勝てたかどうかは分からない…更に言えば、朱鷺沼の一撃はどこか手加減をされていることもなんとなくだが黒装束は感じ取っていた。

「逃げるのならばこちらとしても好都合だな。諸悪の根源を一気に

根絶やしにできるチャンスだから…」

後方から聞こえる声に、このまま本拠地に向かうことの危険を黒装束は悟った。

そこへ戻ることが出来れば、朱鷺沼を全員で袋叩きにすることも可能ではあるが、同時に敵を自陣に招き入れるという事でもあるので、仕留めることが出来なければ全滅だからだ。

それだけは断じて避けるべきだと判断した黒装束は、急遽逃走方向を変えた。

そこは、商店街の裏路地だった。

街灯の明かりは既に大半が消えており、ただでさえ暗い道はまさに一寸先は闇の状態だった。

当然、朱鷺沼は意図を理解しながらも黒装束の後を追う。地の利が黒装束にあるためか、先程よりも間を空けられているが、見失うほどではない。

右へ左へと曲がりくねった道をしばらく走り続けると、ようやく行き止まりの場所にと追い詰めることができた。

その最奥で黒装束は急停止して朱鷺沼に向き合う形を取った。逃げ場が無くなったと言うのに、どこか勝ち誇った様子だった。

そこは紫色の光が怪しく揺らめき、否が応にも腐敗臭が朱鷺沼の鼻腔を貫いた。

「…観念して降伏…という訳では無さそうだな？」

『ほざけ。俺で敵わないというなら、俺より強い物をぶつけければ良い話だ…お探しの相手に会わせてやる』

言うのが早いか、コンクリートで出来た壁が音を立てて沈み始め、『何か』がいる部屋が開かれた。

『ゲグ…ゲゲゲゲ…』

すると部屋の奥からおよそ人のものとは思えないような低いくぐもった声がその場に響きわたった。

背の高さは朱鷺沼、黒装束の二倍ほど。頭と肩が一体化したよう

な、人間という姿形をして伸びた手足を引き摺るような歩き方で奥からゆっくりとその場へと現れた。

あまりにもおぞましい肉塊が動いていた。

腐臭は《コレ》から出ているようで、先ほどまで漂っていた悪臭が更に強くなった。

一瞬だけ眩しそうに目らしきものを手で覆ったが、慣れるとすぐに目の前にある遊び相手を見つけ、ゆっくりと前進し始めた。

真理はその巨体を見上げながら静かに言った。

「…多分コレで正解だな。協力したことへの礼はあるか？」

「礼には及ばない。お前の死体をここに置いていくだけで充分だ！」
言うと同時に黒装束は真理を指差した。

『喰え。《楔》』

その命令を待ちかねていたようで、化け物はその巨体を転がすように真理に近づいた。

その大きな拳を振り上げ、叩きつけるように振り下ろしてきた。
が、距離がある程度確保されている上に、巨体ゆえに初動が遅いため、後退して避けるのは容易だった。

「次はこちらの番だ」

叩きつけられた化け物の腕に飛び乗り、一気にその長い腕を駆け上る。

超重量巨体が軽量級の機動力に対応できるわけもなく、勢いのついた真理の飛び膝蹴りを避けきれずに見事頭部にクリーンヒットし、無残なまでに頭が吹き飛んだ。

少しだけ仰け反ったところをそのまま追撃することを考えたが、様子がおかしいことを察知してそのまま飛び退いた。

『ゲケカカカ！』

頭部を失いながらも化け物は反撃に転じ、真理が先程までいた場所に拳を叩きつけた。真理が地面に着地すると、何事も無かったかのように化け物の頭部が一瞬のうちに再生されていた。

「…普通の怪異ならば、頭部を吹き飛ばされればしばらく行動不能

になるはずだが…？」

心底不思議そうに真理は呟いた。

怪異は人間とは異なり、頭部を撃ち抜こうが切り裂こうが、容易に死滅しないが、さすがにすぐ行動というのは本来不可能である。だがこの化け物は頭部を吹き飛ばされても硬直時間が全く無く、すぐに反撃へと移ったのだ。

真理の驚いた声に気分が良くなったのか、愉快そうに笑っていた。『残念だったな。《楔》はその程度の攻撃ならばすぐに再生して戦闘に復帰することが出来る。さすがの討魔師もそいつには苦戦するだろう…』

《楔》の後方に身を置きながら黒装束は余裕をもって尋ねてきた。『…だから本職ではなく代理だと言っただろう？』

『どちらでも同じことだ。無駄に消耗せずに諦めるのはどうだ？』
『無論断る。志半ばで死ぬつもりは無い』

『なら仕方がない…俺も参加するとするか…』
言うと同時に黒装束は天に向けて何かを投げつけると同時に真理の後方に飛んだ。

殺気を感じた真理は同時に放たれた化け物の攻撃を受け流しつつ反転し、黒装束の攻撃を受け止める。

男の手には先ほどより小さなナイフが両手に備えられており、軌道からおそらく首筋を狙っていたのだろう、切っ先が触れるか触れないかのギリギリの場所にあった。

すぐに振り払って間合いを取るが、それも後方にいる化け物の雄叫びで止めざるを得なくなった。

危険を感じて横に飛ぶと、真理の予想通り拳が降りおろされ地面が砕かれた。

「化け物にない機動力をお前が、お前にはない威力を化け物が補う…といったところか？ 即席の組み合わせにしては十分な効果が出ているようだな」

『随分と余裕そうだな？ だがこれだけでは終わらんよ』

避けた先には既に男の回し蹴りが待ち構えており、空中に浮いていた真理は当然避ける術も無くその攻撃を胴に放たれた。が、それを察知していたのか、真理は腕を盾にすることでダメージをいくらか減らすことができた。

衝撃で体が飛ばされ、地面に着地すると同時に体勢を立て直そうとしたところを、突如腕に鋭い痛みが走った。

「くっ!？」

『チツ…多少ずれたか…』

舌打ちをしながらも放たれた追撃を後退することによって辛うじて避けることができた。何が起きても対処できる間合いを空け、真理は痛みの走った左腕を見る。

そこには男の持つナイフと全く同じものが、浅くではあるが刺さっており、少なからず出血していた。

『―夜鴉部隊妙技・飛雷― 如何だろうか?』

「…これは…」

最初に飛びかかる直前に投げたナイフによる時間差攻撃だった。ナイフの落下地点に真理が来るよう攻撃で誘導し、落雷の如き速さを持った落下攻撃を当てるというものだ。

黒装束と化け物に意識を大分集中していた真理は避けることができず、攻防の要である腕を損傷したというわけだ。

だが扱いは容易ではない。

直線で標的に当てる普通の投擲とは異なり、この攻撃はナイフが落下する瞬間に標的の位置が落下地点に居なければならぬ、至極命中率の低い技だ。

「夜鴉部隊…といったな?」

真理は刺さったナイフを引き抜きながら言った。その表情はナイフが刺さった瞬間の驚きは既に治まり、元の表情になっていた。

「この技…そして今までの戦い方や動き…貴様、狐炎を知っているな」

その問いは、疑問ではない確信の問いかけだった。

その名前を聞いた黒装束は思わず動きを止めて警戒の色を強くした。

追撃に入ろうとした体を引き、構え直した。

立ち位置は《楔》の後方。

この状況においては最も安全な地帯だった。

『狐炎様の名前を知っているとは驚いた…貴様、本当に何者だ？』

「…少しその男に因縁があるだけだ。だが…これでようやく二つ、か…」

真理は静かに呟きながら構えを直した。

先程腕に刺さったナイフを右逆手に持ち、横後方にゆっくりと構える。

「狐炎が関与している、というのならば楔の存在も大体理解出来たな。二年の間に随分と怪異生産技術が進歩したようだな…」

黒装束のわずかな動揺を気にすることなく続けた。

「恐らく、その化け物には核となる『媒体』が埋め込まれているはずだ。完全に怪異には成りきっていない、というのが今のその化け物の現状だろう」

話しながらも真理は自分の居場所を確認する。

『…分かったところでもう遅い。貴様は前方の《楔》、後方の壁、そして俺で逃げ場はない。素直に諦めて贄となれ！』

言つと同時に再び黒装束は攻撃を仕掛けてきた。

その動きを合図に、楔も雄叫びのような低い声をあげながらゆっくりと腕を後方に振り上げた。

黒装束は真理の軸足となっている右足を狙ってナイフを投擲してきた。

投げつけられたナイフを、足を上げるだけで避けて反撃に出ようとしたところで楔が拳を振り上げていることに気がついた。

今までとは異なり、叩きつける動作ではなく、拳を突き出すいわゆる正拳突きだった。

飛び上がって避けようにも右足が宙に浮いている状態であるため、

避けるために十分な高度は確保できないと判断して飛び退く事にする。

今までの攻撃から分かった範囲外へと。

だがそこで予想外の事が起こった。

楔の腕が、勢い衰えることなく真理を追いかけていたのだ。

「何!？」

突然の事に避けきることもできず、空中で体を捻ることによってまともに食らうことは防げたが、軌道上に残っていた左腕に少し当たってしまった。

左腕はありえない方向へと曲がり、この戦闘中では全くの使い物にならなくなってしまったことは、明らかだった。

体勢をすぐに立て直し、顔を上げると伸びきった楔の腕の一部が細く伸びきっていた。

急いで飛びかかり、右手のナイフを勢い良く振り下ろすと、僅かに骨らしき抵抗があったが、ナイフの切れ味のおかげか容易に楔の腕を切り落とすことができた。

楔は驚いたように身を大きく退き、間合いが一気に広まった。

「腕をやられたか…だが、貴様の左腕も使い物にならなくなっているはず!」

その空いた場所へと入れ替わるように黒装束が飛び込み、二度目の首筋狙いの攻撃を仕掛けてきた。

「二度目は無い。そして正面なら片腕が使えなくても充分だ」

その言葉通り真理は残った右腕だけで左右から迫る剣戟を受け流し、相手の勢いを利用して肩からの鉄山靠を放ち、黒装束の胴に反撃する。

「グッ…カハあ…?!」

予想外の反撃に対応できず、黒装束は肺に入っていた空気をすべて吐き出したような声を上げ、体を支えきれず地に伏せた。

「…勝負あり…だと思いが…どうする?」

構えを解き、間合いを取りながら真理は黒装束に静かに尋ねた。

その目は誰が見ても「諦める」と言っていることが明白だった。
『…終わらん…終わらせん…！ この程度の痛手で…負ける訳には…！』

歯を砕かんばかりに食いしぼり、激痛に見舞われながら、覚束無い足を奮い立たせながら黒装束はゆつくりと立ち上がった。

真理は半ば呆れながらも、その異様な覚悟に心の中で賞賛を贈っていた。

何故、その覚悟を正しく尽くさなかったのか？

何故、人を害する道を歩んでしまったのか？

浮かぶ疑問を問い質すことも、今の彼にはもう不可能だった。

一心に狐炎を信じきっている今、決して彼の芯は曲がらないだろう。

「……これ以上戦うというならば、ひとつだけ忠告…と言っても、もう遅いだろうが…」

真理は黒装束の後ろを指さして…

「後方注意。以上」

『何…？』

言われて振り返ると、大口を開けた化け物がそこに居た。

先程まで共闘していたと思っていた相手が牙を向けてきたのだ。た。

『…あ…』

考えればこの化け物の行動は至極明快だった。

黒装束は化け物に対して『喰え』としか命令しておらず、明確な相手を指し示していなかったからだ。

考えずに本能のみで動くこの化け物に、真意を理解するなんて芸当は出来るはずも無く、先程の攻防で位置が入れ替わり、最も近い者が黒装束になったからそれに食いついたただけだ。

逃げる間もなく、抵抗する間もなく、黒装束は頭から食われ、肉が引きちぎられる音、骨の碎ける音が広場に響いた。

化け物是一心に死肉を貪り、それを己のものにしていった。

その瞬間を狙い、真理は楔の胸に重い一撃を放った。

楔の肉を貫き、骨を穿ち、深々とその右手が刺さり込んだ。

ただ楔は痛みを感じていないのか、特に気にした様子もなく真理に拳を降り下ろそうとしたが、真理の次の行動のほうに遥かに速かった。

「ウオオオオオオ！」

雄叫びと共に楔の体内に沈んだ腕を引き抜き、その場から飛び退いた。真理の右手は当然楔の血により赤く染まっていた。

その手に漆黒の珠を握られて。

禍々しく、見ているだけで呪われそうな、そんな邪悪さを感じるような物だった。

楔の傷口からは尋常ではないほどの血飛沫が飛び、辺り一面を赤黒く染め上げる。それは真理も例外ではなく、黒く濁ったような血が顔へ足へと容赦なく降り注いだ。

「ゲヲオオヲオオオ!?」

その珠が抜き取られた瞬間、楔は苦悶の声らしきものをあげながらその場で突如暴れ始めた。拳を至るところに叩きつけると、体はその衝撃に耐え切れずに引きちぎれ、その巨体を支えている足は砂の城のごとく崩れつつあった。

「け……お……」

全てが崩壊する寸前に、楔は真理へと視線を向けた。

「あり……が………ト……」

何人もの声が混じったような、非常に聞き取り難い声だった。

真理はその声を背に受けながら、朝日が昇る前にその場を立ち去った。

――三時三七分・浦部ビル高層階――

「失礼しますよ。何か変わったことはありませんでしたか？」

街の至る場所を映し出した画面が所狭しと並んだ一室に、静かで丁寧な男の声が響いた。

足まで届く黄金色の中華服に身を包み、灰色の髪を中心で分けた

糸目の男だった。

浦部ビルの下に設置されたモニタールームは常に陣馬市の様子を、それこそネズミ一匹見逃さないほど映し出していた。

男の声を聞いて中で映像を確認していた人間は全員慌ててその場から立ち上がった。

「狐炎様！？ わざわざこのような場所まで……！」

「そう固くならなくても大丈夫ですよ。少し暇だったので寄ってみただけですので……ところで、先程も尋ねたように何か変わったことはありませんでしたか？」

狐炎と呼ばれた男は部屋に付いているモニターの画面を見回して、変わったものが映っていない事に少し落胆したように息を吐いた。

「……今は何も無い様ですね……それでは失礼……」

「申し訳ありませんが、実は先程『討魔師』らしき人間が二十三番地区の映像に映っていました！」

室外へ出ようとしていた狐炎を見て、一人の男が慌てて声を上げた。

その言葉を聞いて狐炎は外に出ようとした足を止めて立ち止まった。

「……それは大変ですね」

振り返ると声を上げた男に静かに近寄った。

「その映像は当然残っていますよね？」

「はい、こちらになります！」

緊迫した様子ながらもデータの中から必要な部分をすぐに映し始めた。

映像は真理と黒装束、そして化け物の戦闘が全て映し出されていた。

「つい先程……と言っても一時間ほど前の映像ですが、『楔三式』及び黒装束小隊長を同時に相手して生き延びており……少なくとも一般人ではないと判断して報告させていただきました！」

「……………」

狐炎は聞いているのか聞いていないのか分からない黙ったまま静かに映像を見つめていた。その反応が男に不安を感じさせたのか、間を埋めるように話し続けた。

「た、ただ『対魔武具』の使用は無かったので討魔師かどうか断定できませんでした！」

『対魔武具』

討魔師が怪異に対抗するために神から授かる武具である。

討魔師は基本一般人よりも身体能力が遥かに高いが、それでも怪異の超常的な能力…例えば先程楔三式の見せた再生能力を打ち破る事は容易ではない。

そこで必要なものが『対魔武具』である。

人間が怪異に対抗できる数少ない手段であり、これらで攻撃することによって怪異の特殊な能力を打ち破り、討伐することが出来るだが今回の真理の戦闘では対魔武具を用いられなかったために、男は討魔師かどうかを判断できなかったのだ。

「またこのレベルの実力者が現れるとは思っていなかったのですが、どのように対応すれば良いのか分からず、失礼ながらも狐炎様に今後の対策をお尋ねしようと…」

男は意を決してそう尋ねたが、狐炎の反応はほとんどなく、嫌な沈黙がしばらく続いた。

問題の映像が終わると同時に狐炎は楽しそうに笑い始めた。

「成程成程。これは非常に面白いものが見られましたね…フフッ」

映像は丁度真理が逃亡した場面で止まり、その一場面を見ながら狐炎は笑いをこらえきれない様子で笑い続けた。

「こ、狐炎様？」

「ああ、失礼しました。それで、君たちは何をそんなに恐れているのでしょうか？」

「…いえ、いつもの狐炎様なら『連帯責任』と言い出して罰を与えるのではないかと思います！」

直立不動に構えながらも、男の体は恐れるように少しだが震えて

いた。

「そうですか、そんなに罰を受けたいのですか？ 私が別にしなくても良い、と言ってもですか？」

「申し訳ありません！ 出来れば受けたくありません！」

その場にいた全員が一斉に地に頭をぶつけんばかりの勢いで謝った。

一糸乱れぬ整った行動は見事ではあったが、謝罪なのであまり格好のよいものとはいい難かった。

「今回は相手が悪かったので、不問にします。さすがにこの者相手に君たちで勝て、というのは水鉄砲でイージス艦を沈めてこい、というほどの無理難題ですからね」

「…では？」

おずおずと顔を上げる男たちに対して、狐炎は静かに微笑んだ。

「寛大な処置、痛み入ります！」

「よろしい。ただし今後この者は私たちの行動の邪魔になる事は見えて明らかなので、即急に倒さなければなりません」

狐炎は静かに部屋を見渡した。

視線が少しでも合った男達はその気迫に思わず息をのんだ。

「この者の相手は私が務めます。君達は彼が私と戦うように舞台を整えてください。以上です。期待していますよ」

その反応でようやくその場にいた全員が安堵したように力を抜いた。緊張した雰囲気は一気に吹き飛び、それぞれの持ち場へと戻った。

「ところで、狐炎様」

「なんででしょうか？」

「今回の服は大分変わったものだったの…」

報告した男は狐炎の身に纏っている衣服を示してそう言った。

「ああ、これですか？ 実は先程本部から送られてきたので着てみたのですが…似合っているでしょう？」

狐炎は嬉しそうにその場を一回転した。体の軸が一切ぶれず、か

なり鍛え上げられていることが男から見ても一目瞭然だった。

「はい。それはもう」

「フフフ、そうでしょう？　やはり己の国のものが一番合いますね
……」

男の反応に満足したのか、そのまま笑いながら狐炎はモニター
ームから静かに出ていった。

ドアが閉まり、しばらく歩いていると狐炎は先程の映像を思い出
して再び笑い始めた。

「フフ、しかし、あそこまで弱っているのであれば私も討つこと
が出来そうですね」

見開いたその瞳は血の様な真紅だった。

血潮編 其ノ七

「ちょ、ちよつと！ 朱鷺沼君、何があつたのですか！？」

夜が明け、日が昇ると同時に坂井家の玄関には全身を血で汚した朱鷺沼が居た。

その何かあつたと言わんばかりの格好に陽菜子は驚きながらもその汚れを落とすために二三枚タオルを持ち出し、朱鷺沼に手渡した。

「…少し勝負を、な…」

渡されたタオルで簡単に頭と体を拭くが、それでも簡単に落ちるものではなく、服の所々に赤黒い跡が残っていた。

銀色の装飾も赤い血がこびり付いており、ほとんど服の色と一体化していた。

「これは…落ちそうに無いです…え？」

跡が残ってしまうと言いかけた所で陽菜子は奇妙な光景を目の当たりにした。

血で汚れていた場所が目に見えて綺麗になつていったのだった。

赤い服に施された銀は徐々に輝きを取り戻し、数秒後には新品同様の真新しさを持っていた。

驚いて朱鷺沼の顔を見上げると、こちらも先程の汚れ全てが綺麗さっぱり消えていた。

「え…い、一体何が？」

「？ 何を驚いて…つてもしかして急に血汚れが消えたことか？」
体を軽く叩きながら朱鷺沼は家へと上がった。

「単なる浄化術の一つだ。討魔師であれば見習いでも簡単にできるものだ」

そこで朱鷺沼は陽菜子が下をむいて震えていることが分かった。

何かと思つて立ち止まると、低い声音で尋ねられた。

「…それでは、このタオルを出さなくても良かったということですか…？」

怒りを抑えきれない、というような陽菜子の気迫に、先程まで人外の化け物と闘っていた朱鷺沼も思わず身を引いてしまった。

「……そう言われれば……そうだな。不要だ、というべきだったな」
その発言が陽菜子の感情の堰を壊してしまったようで、返されたタオルを強く握りながら鋭く顔を上げた。

「それなら早く言ってください！ これお気に入りであったんですよ！」

元は綺麗な桜色のタオルだったが、朱鷺沼が血を拭くために使ったために当然赤く染まり、とてもではないが今後使えるようなものではなくなっていた。

恐らくは朱鷺沼が血塗れで帰ってきたために、気が動転してそれがお気に入りの物だとは気づかずに持ってきたのだろう。

「……いや、何と言うべきか……… 本当に済まない」

「何ですぐに血を消せるというのにわざわざ受け取って使ってしまったのですか！？」

「出されたものは基本使うよう言われたのでな……」

「物と場合によって変えてください！ これは元に戻せるのですか！？」

徐々にボルテージが上がってきたのか、陽菜子は鬼気迫る様子で、血で汚れたタオルを朱鷺沼に押し付けた。

「………」

「………どうなのですか？」

反射的に受け取り黙り込んでしまった朱鷺沼を（無意識的に）追い詰めるように陽菜子が尋ねると、静かに首を振られた。

横に。

「済まないが……ここまで吸収されていると無理だ。俺の服を触ってもらえば分かると思うが、汚れを弾くものでなければ完全に元通りにすることは不可能だ……」

「………！！」

次の瞬間、坂井家から乾いた音が快く響き、近所は一瞬何事かと

驚いた。

「それでは説明をするが…いい加減機嫌を治せ、そつぽを向くな。話がしづらいだろうが…」

坂井家のリビングにて。

朱鷺沼は当然のようにフロアリングの上で正座をさせられており、テーブルの上には様々なものが広げて置かれているが、肝心の説明相手が話を聞く体勢ではないので始められないでいる。

朱鷺沼の頬には真っ赤な紅葉が出来上がっていた。

先程の乾いた音は堪えきれなくなった陽菜子が思わず手をあげ、勢い良く張り手を見舞ったがために出来上がったものだった。空手部主将相手に勝てる実力を持つだけあってかなり痛かったようで、朱鷺沼は時々さすって痛みを和らげていた。

「…勝手に始めるぞ。まずはお前を襲った怪異の正体がある程度分かった」

仕方なく一方的に話し始めると同時に朱鷺沼は何かをテーブルの上に静かにおいた。

さすがに無視し続ける訳にもいかなかったのか、陽菜子は澁々ながらもテーブルの上に置かれたものを見た。

同時に今までの怒りが一瞬で吹き飛んでしまった。

「……………何ですか、これは？」

置かれたものは、朱鷺沼が先の戦闘で楔から引き抜いた黒い珠だった。

日の光が差し込んでいるリビングの中でも、珠の中心が全く見えないことに陽菜子是不気味さを感じられずには居られなかった。

だが同時に、よくわからない魅力のようなものを感じ、思わずその珠を触ろうとしていた。だが、それは触れる寸前で朱鷺沼に腕をつかまれることによって阻まれた。

「悪いがこれも触らせることはできないな。お前も化け物の仲間入りをしたい、というのなら話は別だが？」

そう言われてようやく陽菜子は我を取り戻して慌てて手を引つ込めた。

「これが以前話した『媒体』だ。ただ少々特殊な物だが…」

「…これが…ですか？」

「あまりまじまじと見ないほうが良いぞ。見る人間を魅了する様に作られているから、また触ろうとしても防げるかどうか分からないから…」

朱鷺沼の言葉を聞き、陽菜子は視線を逸らした。

「でも…こんなものが化け物の正体…なのですか？」

なるべく視線を珠に向けないようにしつつも尋ねた。

「正体…と言えばそうだな。たしか《楔》…といったか？ ただしこの珠単体では何も出来ないから安心しろ…そこで説明が必要になる」

朱鷺沼は『媒体』と呼ばれた珠を指で軽く叩いた。

カッン、と硬い物同士をぶつけ合ったような音が響いた。

真理が左手の薬指で軽く珠を叩いた音だった。

「これは従来の媒体とは異なり、人肉・人骨を集め形作ることによつてようやく自律行動をすることが出来るようだ」

「……怪異に成らなくても、ですか？」

「成らなくても、だ。それが理由で怪異探索には引つかからずに入食いをする事が出来た、というわけだ」

話している間、朱鷺沼は一度たりともその左手を珠から離さずにいた。

「…でも、そんな物がどうして…？」

「この珠を作ったのは…かなり上位の怪異で『狐炎』という奴だ。怪異の中でもかなりの実力を持ち、任意に怪異を作り出す方法を編み出している。今回は死人を集めることで『怪異』を創り出そうとしたようだ。幸い今回は怪異になる前に討伐出来たが…恐らく他にも媒体は作られているだろうな…」

忌々しそうに呟く朱鷺沼に、陽菜子は思わず息をのんだ。

が、それも一瞬のことで、朱鷺沼はすぐに元の無表情へと戻っていた。

「そして、これが非常に効率良く出来た構造になっているのだが……」
言いながら手帳の真っ白なページに何かを書き込んできた。

以前の様に『媒体』『思念』『人間』という順に上から書かれているが、異なつたのは人間の部分が複数書かれており、そのうちの一つがバツで大きく消され、その隣の人間の上には『恐怖』と足されていた。

「死人には想像できると思うが『怨念』という負の思念が十分に宿っていて、人を喰らう……すなわち殺すことで珠に怨念を蓄積させ、さらには周囲の恐怖も発生させ、それを取り込むことができる。――石二鳥の方法だ」

「でも、あれだけの大きさなら相当数の亡くなった人がいる、ということですよ？ どうして今まで気づかれずに済んだのですか？」

「……これは説明すべきか……？」

陽菜子の問いにしばらく頭を悩ませていた朱鷺沼だが、五分ほど考えていると、結論がでたのか、一息をついてから静かに言った。
「……この件には間違いなく浦部も関わっている」

「……………え？」

いきなり出てきた名前に、陽菜子は驚きのあまり間拔けな声を上げてしまった。

「最初に会った夜にも『仮の話』として言ったが、恐らくそれは本当の事になっている」

思考が一瞬止まった陽菜子を一切気にする様子もなく朱鷺沼は話し続けた。

「具体的にいえば、『都市開発』と言って街の一部に化け物を隠せるような場所を作ったり、警察などに手を回して捜査をしないようにしたり、『狐炎』の『媒体』製造に協力したり……詳細に調べればもっとあるだろうが、大まかなところではこんなものだな」

淡々と述べ上げる朱鷺沼に対し、陽菜子は困惑していた。

突然に明かされた事実があまりにも衝撃的過ぎて、ほとんど言っていないほど思考が追いついていなかったのだ。

話はここで一旦止められており、真理は陽菜子が落ち着くまで待った。

「…ど、どうして浦部グループはそんな事に手を貸しているのですか…？」

「単純な話、儲けるためだな」

言葉をようやく見つけ出した陽菜子に対して、真理の反応は極めて冷淡だった。

「人為的にアウトブレイクのようなことを発生させることで陣馬市を犠牲にして、全国の…いや、可能ならば世界レベルで製薬市場を拡大しようとしているようだ。事実、ここ最近の浦部は『製薬部門』に関して力を入れ始めているからな。その場所として陣馬市が適所だったというわけだ」

その証拠と言わんばかりに真理は手帳のある場所を開いて陽菜子に見せた。

そこには小さくではあるが『浦部製薬・新種の菌を発見し、同時に抗体の精製法を模索』と書かれていた。

差し出された記事を読むと『後天的に生物を奇形種にする菌を発見』や『発見場所である陣馬市に新・本社及び研究所を設立』などと書かれていた。日付は一年半前の物だった。

…丁度都市開発が開始された頃だった。

「陣馬市は…お前もおそらく知っているだろうが、三方を山に囲まれ、唯一開かれているはずの海に対しては高い防波堤がそびえ立っている。自然と人工物によって封鎖されている状態だから、秘匿性も自然と高くなっている」

相も変わらずお世辞にも上手いとは言えない図ではあったが、『陣馬市』と書いた周辺に『山』を三つ、『防波堤』を南に一つ置かれ、それを見た陽菜子は手を震わせた。

「そんな場所で危険な生物が跋扈している、と聞いてわざわざ乗り

込んでくる馬鹿は極少数だろう。もし乗り込んでくれば化け物で喰らってしまえば何の問題も無いからな。一切の妨害無く媒体を製造できる…というわけだ」

「……………そ、そんな…」

「信じる信じないは自由だが、これが陣馬市を襲っている、ということだけは事実だ」

それで説明は終わり、と言わんばかりに真理は広げていた手帳を片付けて天井を仰いだ。

「だ、大丈夫ですか？」

「ああ、少し長く話したから疲れたただけだ。ただでさえ話の内容が内容だから、な…それで今後の対策についてだが…」

上に向けていた顔を元に戻すと、ようやく真理は気がついたように尋ねた。

「その格好はどう見ても私服だが…今日学園はないのか？」

真理の指差した陽菜子の格好、は白のセーターにデニムのズボンであり、とてもではないが学園に向かう格好ではないことは確かだった。

「あ、はい。今日は学園の創立記念日で、やるべき生徒会業務も終わっているの…」

腕を広げながら陽菜子はそう言った。

その答えを聞いた朱鷺沼はしばらく顎に手を当てて悩み始めた。

数分すると手にもっている黒の珠を見てようやく考えがまとまったようで、静かに腰を上げた。

「それなら好都合。お前にしてもらうべきことは一つ。今日は一切外に出るな」

「……………え？」

突然の命令に呆気にとられた陽菜子を気にすることなく、真理はドアへと向かった。

「俺はこの珠を破壊しなければならいからな。人の居ない場所…そうだな、鳥羽山にでも向かうとするか」

「私もついて行つては…」

「駄目だ」

朱鷺沼の後に続こうと陽菜子は思ったが、それも朱鷺沼の鋭い視線で思わず持ち上げた腰を下ろしてしまった。

視線で陽菜子を制しながら立ち上がるうとしなくなったことを確認すると、朱鷺沼はその手にある黒の珠を持ち上げた。

「…というのも、この珠を破壊した瞬間に恐らく高濃度の怨念が散らばるだろう。周囲に一般人がいては何が起こるかわからないから、安全のためだ」

それでも言うことは無くなった、と言わんばかりに真理は静かに坂井家から出ていった。

取り残された陽菜子はやることが全くと言っていいほど無い状況に陥ってしまったので、混乱している頭の中を整理しようとした。

「……………あれ、そういえば…」

陽菜子は朱鷺沼が話している最中、彼の手に気になったものが有ったことを思い出した。今まではその手が隠されていたり、まともに見る機会がなかったため、気付くのに遅れてしまったが、

朱鷺沼の左手薬指には銀色の指輪が付けられていたのだった。

装飾は一切施されておらず、至極シンプルな物であったが、それ故にその美しさが良く映えていた。

「朱鷺沼君…婚約でもしているのでしょうか？」

だが残念ながら答えられる者はいなかった。

坂井家に嵐が吹き込んだのはその眩きの直後だった。

血潮編 其ノ八

陣馬市北東部に位置する鳥羽山。

陣馬市を囲む山の中で最も標高が高く、道が一切整備されていないため訪れる人が非常に少ないために、人の手がついていない状態を長らく保持し続けてきた。

中腹以上の場所は野生生物の生存領域となつていて、気性の荒い猪が縄張りに踏み込んできた余所者に対して、地を蹴り、息を荒らげて威嚇をしていた。

対象は…朱鷺沼真理だった。

「……………」

手には黒の珠が握られており、威嚇する猪を無視して人気のない場所へと静かに向かう。

急な傾斜も苦にせず、獣道以上に歪な木々の間をゆっくりと進んでいく。

山登り開始から一時間ほど歩いた頃だろうか、山頂に到着し、振り返れば木の葉の間から陣馬市を一望できる高さにまで来ていた。相変わらず山と堤防に囲まれた街は、彼から見れば囲まれて閉じ込められているように見えた。

「…今考えるべき事ではないな」

早急にこの珠を破壊し、陽菜子の安全を確保するために戻らなければならぬ。

そのため、破壊後に流出する怨念が人のいる場所まで届かないかどうかを確認するために周囲を見渡した。

「……さすがにここまで来れば大丈夫か」

珠の上下に手をかざし、静かに目を閉じて息をゆっくりと吐く。辺り一面がおぞましいほどの静けさに包まれ、草木の風に吹かれる音が痛いほど響きわたった。

「死しても尚、今世に縛られし亡者に解放を……」

読経めいたものを歌い上げると、黒の珠は突如として大きく震え始めるが、それもすぐに収まった。

同時に珠の中が渦巻き始め、それが抑えきれなくなったかの様に黒い瘴気が勢い良く外へと溢れ出した、

瘴気に触れた草木は目に見えて枯れ始め、とてもではないが春に花を咲かすことは不可能なほどにまで朽ち果ててしまった。

その辺にだけ風が巻き起こっているかのように吹き荒れていた。

「…散！」

真理の掛け声と共に辺りを渦巻いていた怨念は突如その存在を希薄にし、昇天していった。

「…木戸から習っておいて正解だったな」

昇天した怨念たちに向けて手を合わせ、数秒ほどその場で静かに立っていた。

「…で、その三人は何の用だ？」

瞳を開き、森林の三ヶ所を迷うことなく指差した。

「…当てずっぽうだと思われるようだから証明しようか。一番近いのから木の裏、茂みの中、そして俺を中心にして反対に回った木の葉の中…これでも動かないというのならこちらから行くぞ」

その言葉通り真理が一步踏み出すと同時に、先程指差した場所から何者かが現れた。

「…成程、五十嵐隊長がやられ、狐炎様が危険視するわけだ。かなりできるな？」

「窺っていたが…隙も全くと言って良いほどなかったな…」

「……………」

「相も変わらず耳に悪そうな雑音塗れな聞き取りづらい声だな。何かと不便ではないか？　ここでなら誰も聞いていないから外しても問題無いと思うが？」

「要らぬ配慮だ」

「貴様には聞き取りにくいだろうが、こちらの間では雑音無しの会話が可能なのでな」

『……………』

「そうか、失礼したな」

真理の提案を容赦なく切り捨てて、三人は真理を囲むように立ち位置を変えた。

武器は構えず、あくまで様子を見る、といった状態のようで、敵意はあれども殺意は無かった。

「…で、話は戻るが『夜鴉』だったか？ ……が何の用だ？」

目だけで周囲の状況を確認しながら真理は尋ねる。

（…嫌な予感しかないな）

『では伝言だけ。狐炎様が貴様と話をしたい、と』

眼前に立つ男から言われた言葉に真理は僅かに反応した。

「…随分突然な申し込みだな。そして俺の予定も確認せずに決定とは…」

『仕方がないだろう。今朝方決まった事なのでな』

『場所は浦部ビル最上階。他に質問があれば可能な限り受け付けよう』

「…………断れば？」

『それも一つの選択肢だろうが、断れないようひとつだけ情報を付け足しておこう』

『こちらには坂井とやらを人質にしている。断れば女の命は無いと思え』

「……………！？」

出てきた名前を聞いた瞬間、真理はすぐに坂井家の方角へと体を向けた。

だがそんな方法でその情報の正誤が分かるはずも無く、今にも駆け出しそうなほどの勢いで踏み込んだ。

しかしそれも背後に位置取っていた男に阻まれた。

他の二人とは異なり、殺意を無理矢理抑えていたということが良く分かる。

真理の眼前に立ちふさがった男の両手には昨日戦った黒装束同様

バトルナイフが握られていた。男の小柄な体格に合わされているのか、少々小さいものではあったが、それでも人を殺すには十分な鋭利さがあり、刀身が陽光によって鈍く輝いていた。

切っ先が真理の首元へ向けられており、静かに距離を詰めていた。

「随分と行動が速いな？ 断らせない為の準備は万端か」

『伝えることは伝えた… それでは返事を聞こうか？』

『受け入れれば… 殺して良い… でしたよね…？ クフフ…』

皮肉を込めた言葉も通じず、三人はそれぞれ武器を構え、真理との距離を詰めていく。

暗殺部隊『夜鴉』は真理によって二人戦闘不能にさせられたが、それでも暗殺部隊としての実力はかなりのものであり、裏の世界ではかなり名が通っている。

実際これまで浦部の秘密に気づいた人間及び討魔師を始末し、その闇を悉く守ってきた。

故に『始末番』と恐れられ、浦部を暴こうとすれば死が迫る、とまで謳われた集団である。

本来ならば一人でその組織に属する人間を相手にするのは荷が重すぎるのだが、囲まれているこの男は…

「

仁王立ちをし、両拳を腰に構える。

纏う気迫が突如膨れ上がり、囲んで有利であるはずの三人はそのままただならぬ様子に少しだけ怖気付いた。

『ケカアアアア！』

宣戦布告を受け入れられたためか、それともその威圧感に耐えることができなかったのか、真理の背後で構えていた黒装束が勢い良く飛びかかった。

先程までの余裕は一切なく、振りは大きく、動きにわずかなズレが生じており、とてもではないが見られたものではなく、武術を知るものであればその無様さに思わず目を背けたくなるほどだった。

虎に追い詰められた鼠のように。

覆面によって隠されていながらも、その表情が必死の形相であることが分かるのではないかと思われるほどに、彼の目は恐怖で見開いていた。

真理は背後から迫る黒装束の攻撃を易々と避けつつ敵の後頭部を掴み、勢いを利用しそのまま地面に叩きつける。

先程まで意気揚々としていた男は、僅かに呻き声を上げると、糸が切れた人形のようにピクリとも動かなくなった。

黒装束はその瞬間にようやく理解した。

狐炎の例え…『水鉄砲でイージス艦を沈める』という表現が、過大評価ではなかったことに。

ゆつくりと立ち上がる真理の姿は、鬼のような形相と共に口を開いた。

「……………行くぞ！」

…数秒後。

三人の黒装束はその身を地に伏せられた。

『おう、真理か。しばらく連絡がつかなかったが…何か起こったのか？』

鳥羽山を全力で疾走しながら真理は通信機器を取り出し、木戸という討魔師と連絡をとっていた。

三人を倒してから数分。陣馬市の端から端までの移動は異様な身体能力を持つ真理にとっても長い距離であり、時間がかかることを予想した真理はどこか苛立っているような口調だった。

「第一報告は狐炎の存在を陣馬市で確認。対象は浦部グループによって匿われている模様」

狐炎の名前が出ると同時に機器の向こうが沈黙する。

狐炎の名は怪異と敵対する討魔師の間ではかなり知れ渡っており、知らないのは恐らく大馬鹿者か、新米程度だろう。

木戸もその名を知らない訳がなく、その存在がどれだけの危険を孕んでいるのかがすぐに理解された。

彼と戦って死んだ討魔師の数は十数人と、対魔のプロフェッショナル相手にこの数は例外的な強さを持っている怪異であるという証明でしかない。

しかもそれが、全力を出さず、の結果だ。

底が計り知れないのだ。

真理の足音だけが静かに響いたが、それも数秒のことだった。

『…予想より圧倒的に速く衝突することになったみたいだな。それで、次は？』

「保護対象・坂井陽菜子が捕縛された模様。それで…木戸の参戦はやはり不可能か？」

『その通り…だな。武具が完全に機能停止、だからなあ…原因はある程度分かっているが、かなり時間が掛かりそうだな。今回はお前に手を貸すことはこれ以上無理だろうな』

「…そうか」

しばらく、嫌な沈黙が流れた。

その間に山のふもとに降り、残るは浦部ビルまでの一本道だった。だが、降り立つと同時に真理はその場で足を止めた。

静かに空を見上げ、深く息をついた。

「…木戸、一つだけ、事前報告しておくことがある」

この時の真理の声は、非道く悔しそうな、悲しみの満ちた声だった。

その只成らぬ様子に、木戸はふざける気配を一切持たず、真剣な声で答えた。

『……内容は大体予想できるが…聞こうか？』

真理はゆっくりとその内容を口にした……………

血潮編 了

浦部ビル最上階。

陣馬市一帯を全て見回すことが出来るほどの高度を持ち、闇が徐々に覆い被さるに連れて街に一つ、また一つと明かりが灯っていく光景が見渡せた。

その光景を見下ろしながら、狐炎は愉快そうに笑った。

「どうでしょうか、この街の景色は？ 確か地元民である貴方ならここが鳥羽山以上に見晴らしが良い、ということは分かっていただけるでしょうか？」

話しかける相手は、両手両足を拘束された坂井陽菜子だった。

後ろ手に鉄枷を着けられているために全く行動することができず、誘拐の首謀者である狐炎を睨むことしかできなかった。

その視線を一身に受けながらも彼は楽しそうに笑っていた。

「どうかいたしましたか？ この景色がお気に召しませんでしたか？」

「……………私の意思を無視して無理矢理連れてきた相手に対して楽しそうにするほど壊れた感性は持っていないので……」

真理が坂井家を去った後、狐炎直属の部隊である「夜鴉」の二人が突如として侵入し、陽菜子捕縛にかかった。

当然黙って捕縛される訳もなく、可能な限り抵抗をしたが、非人道的な鍛錬を積んだ猛者に勝てるわけもなく、今の状況に至るといっわけだ。

「手荒な真似をしたことについては一応謝っておきます。すみません」

一片たりとも誠意のこもっていない謝罪に、陽菜子は怒りを覚えた。

「ほほお……こんな小娘が狐炎様の進歩の糧になるのですか？」

浦部季助。

その名の通り浦部グループのトップであり、同時に陣馬市の都市開発提言者である、本来ならば陽菜子や陣馬市民にとっては頭の上からない人物であるのだが、この光景を見た陽菜子は彼を睨まずには居られなかった。

五十代後半とは思えないほど黒々とした髪を持っていたが、図体はまさに肥え太った豚という表現がピッタリと当てはまり、灰色のスイツははち切れんばかりの状態だった。

都市開発を提言した当時に比べると、誰もが全くの別人ではないかと疑ってしまうほどに体つきが変わっていたが、陽菜子は記憶の中の男の声と眼前に立つ男の声が一致している事に気がついた。

陽菜子にとって信じたくなかった真理の仮説が、見事なまでに的中していたのだった。

「いやはや、この坂井陽菜子とやらを喰らうことで狐炎様もまた一つ最上位怪異に近づく、という訳ですか！ 目出度い、非常に目出度いですね！」

「フッフ、少々気が早いですよ、季助さん。それにこの娘はまだ『餌』ですよ？」

興奮している季助を宥めながら狐炎はゆっくりと陽菜子に近づいていった。

何をしてくるか分からない恐怖で、陽菜子は無意識的に体を引きずって後退していた。だが手足を拘束されている状態で、自由な狐炎の歩み寄りから逃げ切れるはずも無い。

狐炎はしゃがみこんで陽菜子の顎を掴んで顔を持ち上げた。

「特別ゲストを呼び寄せるための…ね？」

「……………」

嫌悪感に耐え切れず陽菜子は封じられていない口で狐炎が差し出した手に容赦なく噛み付こうとした。

「おお…威勢が良くて良いですね」

だが別段気にする様子もなく、狐炎はその様子を楽しそうに手を引いて、静かに立ち上がった。

「小娘…！ 貴様狐炎様に何を！」

「いえいえ季助さん、この程度のことなら大した問題ではありませんせんよ？」

陽菜子の行動に怒り気味に立ち上がった季助だったが、それもすぐに駆け寄った狐炎によって見事に押さえつけられた。

立ち上がろうとした季助の肩を掴んで強引に押し戻し、何事もなかったような状況に戻ってしまった。

「それに…彼女の私への行動は無意味ですからね」

余裕を含んだ狐炎の声に陽菜子は自分の怒りを制御することがうまくできなくなっているのか、不快感を露わにしながらも静かに尋ねた。

「……………どういう意味ですか？」

「そのままの意味ですが…そうですね、実際に見せたほうが早いでしょうね」

そうついいながら狐炎は室内を軽く見渡し、部屋に置かれた机の上に乗っている物に目を付けた。

ペーパーナイフ。

季助の趣味なのか、派手な装飾によってナイフ部分と持ち手の比率が一对一で、狐炎はそれを握って高く掲げることによって陽菜子と季助に見せつけた。

「はい」

と、軽くボールでも投げるかのような気楽さでそれを真っ直ぐに突き刺した。

狐炎自信の左手に。

「……………!？」

驚きの声上がる間も無く、ペーパーナイフは狐炎の手を貫通していた。

見ている二人の方が痛みを感じたように視線を背けたが、そんなことを何一つ気にすることなく狐炎はそのナイフで決るように回し、何の躊躇いもなく引き抜いた。

「はい、ではこの手を見てください」

刺さっていたナイフが抜かれた手を、視線を逸らした陽菜子の前へと遠慮なく見せつけてきた。

必死に目を閉じて抵抗するが、無理矢理指で瞼を開けられて、否応なく視界に入れざるを得なくなった。が、そこで奇妙なものを見た。

異常な速さで穴のあいた部分が塞がっていくのだった。

黒い液体のようなものが傷口から染み出し、空いた穴を埋めていくように広がっていき徐々にその黒い液体が肌色へと変わり、最後には元通りとなっていた。

目の前で起こったことが受け入れきれずに、陽菜子は呆然としてしまった。

「ご理解いただけたでしょうか？ 多少の傷を付けたところで、私には何の障害にもなりません。傷害ありませんがね」

驚いた陽菜子の反応に満足したのか、狐炎は高々と笑いながら陽菜子から距離を取った。

右手に持っていたペーパーナイフを元の場所に戻して、机の上に座った。その場を支配していることの証明か、足を組み、片肘を付いてその手に顎をのせて。

笑顔を崩すことなく口に煙草をくわえて、火を点けた。

己の指から、青白い炎を出すことによって。

「相変わらず心臓に悪いので事前に話してください、狐炎様…」

「すいません、ついさっき思いついた事だったので。それに他にも話さなければならぬことはありますので…」

「…私の方から話すことはありませんが…」

「そうですね…まずは彼について少し話をしましょうか」

陽菜子の反応を完全に無視しながら狐炎は話し始めた。

「本日夜明け前に一体の《楔》が討伐されまして、偶然監視カメラの映像に犯人の姿が写っており、調べてみたら『あの』真理だということで驚きましたよ」

言いながら何やら手にある小さなボタンのようなものを押した。
すると窓ガラスを隠すようにスクリーンが表れ、映像が流れ始めた。
内容は勿論、真理と楔・黒装束の戦闘場面だった。

記憶に残っている化け物の姿に一瞬体が竦んだが、映像だと意識
することで辛うじて目を背けずにいられることが出来た。

楔の振り下ろし攻撃から始まり、黒装束の奇襲、真理の反撃と、
陽菜子にとっては常軌を逸した戦闘劇に、彼女は目を離すことがで
きなくなっていた。

重い攻撃を喰らいながらも体勢を立て直す真理の姿が写ったとこ
ろで狐炎が呟いた。

「少々残酷な場面も映されていますが…まあ、その様子なら大丈夫
でしょうね」

その宣言通り、楔が黒装束を襲い、その肉を貪る場面が鮮明に映
し出された。

「……ッ!？」

滴る血に引きちぎられた肉、砕かれた骨を余すことなく映したそ
れから目を背けようとも思ったが、次の瞬間真理が楔に対して攻撃
に移った場面が表れた。

一瞬のうちに間合いを詰め、楔の胸に会心の一撃を叩き込み、黒
い珠を容赦なく引き抜かれた時だ。

その後、映像は楔の肉体が崩壊し、真理がその場を立ち去った所
で終了した。

「…何か気づいたことはありませんか？」

役目を終えたスクリーンが上がっていく最中に、狐炎が静かに陽
菜子に尋ねた。

それは、陽菜子が何かに気付いたことを見抜いているかのような
問いかけだった。

「……………」

映像の時間としては五分ほどだったが、その中でも特に異様なこ
とがあることに陽菜子は気付いた。

途中、片腕が完全に使い物にならなくなっていたことに。

楔の攻撃を受けたあと、真理の左腕は確実に骨折している形になっていたが、坂井家に戻ってきた時は傷や怪我は全くと言っていいほど無かった。

堪えている様子も無く、完治しているという動きだった。

「……………」

「やはり、思い当たることがあるようですね」

言いながら狐炎は先程自分の手を穿ったペーパーナイフを再び手にしていた。

「彼の治癒力は異常なまでに高かったこと…貴方は見ていますね」

答えは全く聞いていない。反応のない陽菜子に近づきながら狐炎は愉快そうに笑いながら歩み寄ってきた。

「そしてもう一つの情報として…本来『討魔師』に『代理』などは一切存在しません。現場調査などは全て討魔師のみで実行されて、外部の人間への協力は禁じられているのですよ…怪異は秘密裏に処分することが義務ですからね」

何も言えることが無くなってしまった陽菜子は、返す言葉もなく、俯くしかなかった。

「簡単に結論だけ言ってしまいますか…あの男…朱鷺沼真理は…」

「私や楔同様の、化け物です」

次の瞬間、上り切ったスクリーンに合わせるように、黒い影が突如として窓の外へと表れた。

同時に窓ガラスがけたたましい音を発しながら粉々に砕かれた。

「な、何だ！？ 何事だ！？」

季助は突然の出来事に慌てふためき、その場にいた二人を見捨てるように真っ先に自分だけその身を机の下へと隠した。

「……………随分遅く、そして派手な到着ですね…？」

ようやく現れたゲストに対し、狐炎は今までにないほど、心底楽

しそうな、子供のような笑顔を、突然の来訪者へと向けた。

「お久しぶりですね？ 『不動の真理』…いえ、『劔鬼の真理』の
ほうが宜しいでしょうか？」

そこに現れたのは、朱鷺沼真理だった。

ただ、風貌が今までとは大きく異なっていた。

風にたなびく髪は雪の如き白銀。

敵である狐炎を睨む瞳は金色。

とても同一人物とは思えない姿だった。

「……………と、朱鷺沼…君？」

だが、纏う雰囲気は変わらず、姿形は異なれど、陽菜子はすぐに
彼が真理だと気が付いた。しかし、真理は陽菜子の問いかけに答え
ず、狐炎へと視線を向けたままだった。

「……………呼び名はどうでも良い事だ、好きにしろ『蒼炎の九尾』」

「おやおや、私如きの通り名を覚えていただけたとは光栄ですね？」

「二年前に嫌というほど記憶に焼き付いたから…」

互いに毒を含んだ言葉を交わしながらも、威圧感をぶつけ合っ
ていた。

それは最早普通の人間が介入出来る余地など一切なく、陽菜子は
例え拘束されていなくても腰を抜かして逃げることもままならな
かっただろう。それほどまでに次元の異なる世界だった。

「しかし大分遅かったですね？ 迎えを送ったはずなのですが…」

「途中に行く手を遮った黒装束を迎えというならば十二人ほど見
けたぞ。まあ少し邪魔だったから黙ってもらったが…」

「それはそれは失礼いたしました。しかし、これで夜鴉は全滅です
か…全くもって使えない奴らでしたね…人間はやはり贅になるべき
存在ですね」

いきなり低くなった声に、机の裏に隠れている季助が「ヒッ！？」
と情けない悲鳴を上げた。

「…………お前の直属の部下だ、と言って彼らは喜んでいたようだ？」
「駒として使うために煽っていただけです。甘い顔一つすれば騙

されて喜んで行動してくれますからね…ただ、ここまで使い物にならなかったことには失望しましたが…」

その目は、まるで人をゴミか何か汚いものでも見るような目だった。

視線の先は、机ではなく、その裏に隠れている浦部季助だ。

「何が精鋭ですか…弱体化した化け物一体食い止められないとは…これは季助さんには命で償ってもらわなければ…ですね」

「あ、え？ う、嘘でしょう？」

「いいえ、嘘ではありません。ですが、今はこの闖入者を討たなければいけませんからね。もう少しだけ待っていてくださいね？」

そう言つと狐炎は静かに右手を季助の隠れている方へと向けた。すると蒼い炎が机の周辺を、それこそ蟻一匹這出る隙間無く覆つた。

机だけは一瞬のうちに燃やされ灰となり、炎の渦に残されたのは季助だけだった。

「うわああああああ！？ な、何故ですか、狐炎様！？ 約束は約束はどうなるのですか！？」

「ああ、『貴方に地位・財産を与える』というやつですか？ それは先程も話したとおり嘘ですよ。まあ、口約束だけで騙されてくれたのは非常に助かりましたよ」

話している間にも蒼い炎は徐々に力強くなっており、少しずつ季助の足場を侵食していった。

「ですがコレで御役御免です。お疲れ様です。送別会は彼を討つてから始めますので、それまで静かに待っていてください」

「……………先約は終わったのか？」
ようやく向き直つた狐炎に対して真理は構えた。

剣術の居合のような構えで、右の手刀を左の腰に置いて、腰を低くしていた。

間合いは約三メートル。

大きく踏み込めば辛うじて届くといった距離だった。

「失礼しました。こちらは準備万全ですが…そちらはよろしいのでしょうか？ 見たところ、ご自慢の野太刀も無い様で…」

「二年前にお前たちが奪ったからだろう」

「そういえばそうでしたね。しかしその状態で私に挑むとは……予想以上に無謀な方だったのですか。それとも…」

狐炎は虚空を切るように手を振ると、蒼い炎が収束し、鉤爪が現れた。

刃一本一本が二の腕ほどの長さを持ち、刃先が大きく前傾しており、掠れば容赦無く対象の肉を抉るだろう。

その魔術じみた行動に陽菜子は目を疑っていたが、狐炎と対峙している真理はわずかな動揺もなく、ただ静かに構えていた。

「……………理由は、単なる独り善がりだ。それ以上でもそれ以下でもない。故に、貴様を狩るのに、正義は語らない」

狐炎の問いを遮り、構えを更に深くする。

その動きを確認した狐炎も、同様に構える。

前傾姿勢の突進体勢。その周囲を蒼い炎が球となり狐炎を中心に勢い良く飛交っている。

「一身上の都合により、貴様を討伐する！」

「ほお…それはそれは楽しみですね！」

その言葉を合図に、蒼と紅は戦闘を開始した。

先攻を取ったのは狐炎の方だった。

迎撃の構えを取っている真理と突撃の構えを取った狐炎の事を考えれば当然とも言える行動だろう。地を蹴った狐炎は真っ直ぐに真理へと攻撃を仕掛けに行った。

突進の勢いが乗った一撃は空を裂きながら真理へと迫っていた。

狙うは最も大きい胴体。

怪異は尋常では無い回復能力を有するが、例外が胴体と頭部である。手足などの末端部位とは大きく異なり酷い損傷を負った場合、それ以外の部位より遥かに繊細な修復が必要である。

修復に時間がかかれば当然隙が大きく生じてしまうため、通常の怪異同士の戦闘ではどれだけこれらの部位を破壊できるかが勝負の鍵となる場合が多い。

突進速度は弾丸にも勝るとも劣らないため、常人であれば次の瞬間には攻撃を受けたということを認知することなく臓物を全てぶちまけているだろう。

だが、怪異にとってはこの程度は少し優れているというだけで、驚くべきことでもない。

その証明と言わんばかりに、真理は易々と狐炎の攻撃を右の手刀で受け流す。

切上げの速度は鉤爪の速度を遥かに上回っていた。

居合の抜刀に似た動きで一点攻撃を後方に受け流し、右手同様に左腰横に構えていた拳を胴に向けて一気に突き出す。

「鬼神流抜刀術・改―追波―」

「…青嵐…！」

放たれた正拳突きを弾き返すように狐炎の周りを浮いていた炎球の一つが盾となる。

真理の拳は蒼い炎の中に飲み込まれ、肉の焦げたような音と黒い煙が起こった。

「……………！？　ちっ！」

それだけで終わらず、他の炎球が次々と真理へと襲いかかった。

一発だけなら問題なく避けることが出来るだろうが、放たれた炎球は真理が確認できるだけでも十個以上、更には狐炎の追加炎弾が容赦無く降り注いだ。

蒼い嵐の名に相応しい威力だった。

真理が十数の炎弾の雨を避け続けていると、その球の影から狐炎が大きく鉤爪を振りかぶって現れた。

狐炎の位置は既に真理の眼前。

間合いは鉤爪の切っ先が辛うじて当たる…すなわち、拳では届かない距離だった。

「……！」

「さすがにこれは避けられないでしょう！」

落下の勢いも加えられて、受けるには重過ぎる一撃を放たれる。体勢を崩している状態では完全に避ける事もできず、狐炎の攻撃が右肩部に被撃する。

四本の紅い線が真理の体に走り、水しぶきが撥ねるかのよう。その線から血液が吹き出した。幸い傷は浅く、出血量も大したものではなかった。

「もう一つ！」

「させるか！」

そのまま勢いに乗って追撃を見舞おうと鉤爪を降り下ろそうとするが、黙ってやられるほど真理は甘くはなかった。

肩を攻撃して地に刺さった狐炎の鉤爪を足で抑え、傷ついた方の片手で狐炎の攻撃を受け止めた。

「鬼神流体術——我心——」

塞がれた狐炎の手を引き、その勢いを殺すことなく真理は肩からの体当たりをぶつけた。

「かはっ……！？」

胸部に深くあたった一撃は狐炎の呼吸を一瞬ではあるが完全に止めた。

衝撃のあまり、狐炎の体は再び宙へと浮いた。

真理は狐炎の体勢が崩れたところにすかさず踏み込み、左の掌底で打ち上げる。

その衝撃に床が耐え切れずに砕けるが、攻撃の勢いは充分だったのか、狐炎の体は天井を打ち破っていた。

人より一回り大きい穴が抜けた天井には曇天の夜空が覗いたが、化け物にとってはどうでも良いことだった。

飛ばされた狐炎の後を追いつ、真理は上の階へと飛び移る。

着地すると同時に強い風が二体の髪を吹きつけた。

鉄の柵しかない、浦部ビルの屋上だった。

陣馬市の灯りだけが照らしているが、高度の問題でほとんど暗闇に近い状態だ。

受けた衝撃がかなり大きかったのか、狐炎は咳込みながら体を起こしている最中だった。

再び構え直した狐炎は先程とは異なり、殺意を持った目で真理を睨んできた。

数分前の余裕は完全に消し飛んでいた。

「は、はは、はははは……！　嘘でしょう？　この私が……不完全な鬼ごときに……！？」

侮蔑の言葉も、彼の今の状態では惨めさを増すだけで、真理はそれを見ないようにと静かに目を閉じた。

「ありえない……二年前は、この私に傷一つ負わせることの出来なかった鬼が……？」

起き上がる様子は生まれたての仔鹿のように不安定で、これが普通の人間であれば思わず手を差し出してしまいそうほど弱々しかった。

だが、この男は怪異だ。

まごうことなく、弱き人ではない。

「悪いが、その時はお前だけではなく、他にも四体を同時に相手していた。その時の結果をお前の実力だと判断するのは思いあがり以外の何物でもない……」

狐炎の見上げた先には、既に肩部の傷と左手の火傷の修復を開始していた真理がいた。

表情は暗闇と光の量のためにぼんやりとしか分らないが、一つだけ明確な事があった。

彼が今表しているのは、まごうことなき怒りの感情だった。

場の雰囲気は一気に張り詰め、歴戦の怪異である狐炎でも息を飲まんばかりの気迫に満ち溢れていた。

「二年の間にお前が進化したことは認めよう。ただ単純に、俺の方が勝っていただけだ」

「こんな場所で…」

風に吹き消されかねないほどの小さな声だった。

「こんな奴に…私の…いや…」

ブツブツと呟き出す狐炎の様子がおかしいことに気付いた真理は急いで構えを直す。

「我が野望、我らが大望、潰えてなるものかああああ!!」

狐炎の咆哮と共に地が大きく揺れ、蒼い炎が渦巻き始める。

圧倒的な熱風により鉄製の柵は銀色から燃えるような赤へと変わり、自重に耐え切れずゆっくりと。

莫大な音量が、辺り一面を大きく揺るがし、少しずつビルの一部が崩壊する。

異常なほどの振動に耐え切れず、真理は手について堪えることが精一杯だった。

『ガアアアアアアア!!!!』

咆哮が宵闇に響き渡り、狐炎が徐々にその姿を変えていった。

鋭い牙が拳大にまで伸びる。

身に付けていた中華服を破りながら、全身に紅の毛を纏う。

装備していた鉤爪が、その手と一体化し、獣のような手へと変形していった。

咆哮が終わると揺れも収まり、ようやく真理は立ち上がることができるようになったが、眼前には人の姿をした狐炎ではなく…

紅の毛並をした大狐がそこにいた。

三本の尾を苛立っているように揺らしながら狐は鋭い眼光を、殺意を込めて真理へと向けた。

「……ようやく九尾の姿を現したか…」

『貴様だけは……何があろうともここで殺す!!』

再び挙げた咆哮と共に化け狐は真理へと飛びかかった。

人型の時以上の速さで飛びかかり、これには反応しきれずに頭突きを見事に食らった。

「……ぐっ!!」

巨体の体当たりをまともに食らった真理の体は軽々と吹き飛んだ。ただし、腕を交差して盾にすることでいくらかの衝撃を和らげているだろうが、それでも緩和しきれない威力だったのだろう、真理は少し苦々しげに歯を食いしばっていた。

『まだまだああああ!!』

狐炎の九本の尾が大きく開き、その先端から炎弾が連続して射出される。

炎の雨は真理に容赦無く降り注ぎ、少しずつ真理を追い詰めていった。

黒煙が巻き起こり、視界も不十分の中、真理は紙一重で炎弾を避け続けるが、それも長くは続かなかった。

左足に一つ当たったことを皮切りに、右肩、胴と続いて次々と当たっていった。

後ろに体が仰け反ったところに更なる追撃をされる。

『ゴアアアアア!』

黒煙の中から大きく口を開け、前足を大きく振り上げた狐炎が襲いかかってきた。

「シッ!」

反射的に真理は左のアップercutで狐炎の顎を打ち抜いて口を閉じさせることができ、同時に狐炎の足元をくぐり抜けることによって攻撃を切り抜けた。

すると同時に真理の背後からは大きな摩擦音が鳴った。

振り返れば先程まで真理がいた場所は既に無数のヘコミと三本の爪痕が生まれており、所々はみ出している鉄筋はあまりの高温のために炭化しているか、爪の鋭さで綺麗な断面を覗かせていた。

真理の受けた攻撃は全て大きな損傷でないため、すぐに修復することができたが、それは相手も同じだったようで、振り向いた狐炎は元の余裕を取り戻していた。

『チッ…外しましたか……ですが、それもすぐに終わらせましょう。力が不完全な鬼相手ならば、次で…』

「勝ちを確信するのはまだ早い」

狐炎の言葉を、真理が鋭く遮る。

息を深く吐きながらゆっくりと左足を下げ、静かに居合の構えに移る。

「二年前の俺の姿…もう忘れているのか？」

『……！』

その言葉に狐炎はようやく気付いたように声にならない声を上げたが、既に真理は新たな行動に移っていた。

「劔鬼の神髄、此处にあり！」

その声とともに、真理が赤い光に包まれた。

だが、それも一瞬の事。

次の瞬間には、全く姿の異なった真理がそこに居た。

全身の肌が赤黒く染まり、額からは拳ほどの長さの角が生える。

腰に下がった一本の太刀が真理の手に握られ、それを静かに抜き払われた。

肩に乗せられた太刀の刀身はおよそ三尺。

重ねは厚く、反りは大きく、波紋は互の目。

白刃が月光に白く煌いた。

月を背にしたその姿は、まさに鬼神の名に相応しいほど、雄々しかった。

『…力は…あの時に失った筈では…！？』

「…此方にも少し事情があつてな…だが、お前たちと戦う術は、この通り…ある！」

言葉と共に真理は太刀を大きく振り上げる。

「鬼神流剣術―迅雷―」

その名の如き迅雷の速さで一閃が放たれる。

それは到底視認できる領域では無い速度で化け狐を襲いかかった。

攻撃に気付いて飛び退いたが、反応が僅かに遅れたために狐炎は左前足を損傷した。

『何…ですって…！？』

狐炎は未だに信じられない、といった様子だったが、真理はそんなことを一切気に止めることもなく攻撃を続ける。

「先程の余裕はどこに行った！？ それともお前は弱い者にしか牙を振るえないのか！」

『！ 舐めるなあああ！』

真理の罵倒に狐炎は再び怒りを露わにして牙を剥く。

太刀と牙がぶつかり合い、火花を散らしながら狐炎も負けじと爪を振る。

攻撃を視認した真理はすぐに牙を押し返し、迫り来る爪撃を受け止めた。

『ここだ！』

その叫び声とともに再び蒼い炎弾が真理の周りに続々と浮かび始めた。

今度は真理を中心として、炎弾で球をつくるように囲んでおり、逃げ場は全くと言っていいほど存在しなかった。

更には狐炎の開いた口からも蒼い炎が溢れていた。

『炎獄！』

その術式を合図にして、炎弾及び火炎が一斉に真理を火の海に沈めた。

炎の雪崩から抜け出した様子もなければ、それをかき消す様子もなく、しばらく蒼い炎は燃え続けていた。

鋼鉄をも容赦無く溶かす炎をこれだけ浴びれば、さすがの鬼もただでは済まないだろう。

だが狐炎は真理が生き延びる可能性も考慮して次の手を打ち始めた。

『影牢！』

術式と共に狐炎の姿が幾重にも現れ始めた。

同時に燃え盛る炎の檻が一閃により切り払われる。

真理を包んでいた炎はすぐに弱まり、捕らえていた者をようやく解放するが、状況は真理にとって不利だった。

「…驚いたな。分身が使えることは知っていたが、まさか真の姿でも出来るほどの力が有ることまでは見ていなかったからな…」

『かはははは、数少ない上級怪異の中でも自身を増やすことができるのは私だけですからね…』

全てが九つの尾を持ち、それぞれが独立した動きをとっている。

その内の三軀程度が前足で地を蹴る動作をすると、三軀足元全てに綺麗な爪痕が残った。

つまりは実体のある分身。

三六〇度逃げ場なし。

「……………」

真理は太刀を左下段に構え、目だけで周囲の状況を確認する。

分身を含めた狐炎の数は九軀。

前衛後衛と分かれながら真理を包囲しており、後衛の狐炎は既にその口に蒼い炎を溜め始めている。

完全に殺しにきている。

『そちらが下手な動きをした瞬間にこちらも集中攻撃をします。今なら降参も選択肢にあります…』

「ちなみに降参すれば？」

『あなたを殺すのは最後にします。他にも浦部季助を殺し、坂井陽菜子を食べらうと、やるべきことは他にもあるので…』

「…その余裕の根拠を聞かせてもらおうか？」

太刀を握り直した瞬間、真理の左方に構える狐炎が反応したが、それ以上の行動ではないと判断すると前に飛び出しかけた体を元に位置に戻した。

言葉通り、攻めに転じればすぐにでも総攻撃を仕掛けるのだろう。真理の真正面に立つ狐炎が口を開いた。

『簡単なこと。前回の戦いで貴方は白兵戦においてはトップクラスではありますが、対多戦ではその実力を十分に発揮できないと見ました。そして私の『影牢』…分け身で、貴方が不利な戦いに持ち込むことができました』

話しながらも包囲網は少しずつ狭まり、真理の立つ場所は狐炎の炎に依ってかなりの高温状態になっていた。

銀髪先端がジリジリと焦げ付き始めるが、包囲されている当の本人はいたって冷静だった。

「……他には？」

『他？　これだけで以前負けたことをお忘れですか？　貴方の剣筋はその時に充分……』

「あまりにも状況が異なり過ぎる。あの時の俺の後方には、彼女がいた。それを忘れたのか？」

構えた太刀を強く握り、大きく踏み込んだ。

「鬼神流剣術―月風―」

横薙ぎ一閃。

太刀の軌跡は真理の胴程度の高さであり、狐炎にとっては丁度顔の高さにあたった。

何駄かはその一閃に飲み込まれ、顔面を見事に一刀両断され、その場で蒼い炎となり消え去った。

「次いで―昇龍―」

後方に回った太刀の勢いを一切殺すことなく、逆風（地面に対して垂直に切り上げる剣筋）で『月風』で届かなかった狐炎へと刀を振るう。

その剣筋を見切る間もなく、正面の狐炎は顎から脳天にかけて竹を割るように綺麗に切り裂かれた。

三昧の狐炎が蒼い炎になって天へ消えていく光景を見てようやく他の狐炎が驚いた様子で真理から距離を取り始める。

『対多数技があつたのですか！？』

「だから状況が異なり過ぎる、と言っただろう。周りが全て敵なら以前のように大技を繰り出すのに注意を払わなくても充分だ」

『……！　影牢・燻！』

次の行動のために踏み込む真理に対し、後方で控えていた狐炎が一斉に炎を吐く。

四方からの同時攻撃に、真理は地上での逃げ場を失った。

「フッ！」

そう、『地上では』、だ。

真理は狐炎の火炎放射が届く寸前に、宙へと飛んだ。

踏み込みは追撃の為ではなく、回避の為の物だったのだ。

狐炎は己の出す火炎全てがぶつかり合うことによつて、空へと巨大な火柱が昇つたが、そこは先程まで真理が居た位置…つまり、今は何もない場所だ。

真理は狐炎を飛び越え、空中で体を半回転させることにより、背後を取ることに成功した。太刀は脇構えからの逆袈裟を容赦無く胴に叩き込み、狐炎を上半身と下半身にと分断した。

「……は？」

残された分身のうちの一つが間の抜けた声を上げているうちに、真理は次々と分身を切り捨て、遂には本体一つという状態にまで戻されていた。

「…本当に運だけは悪いな…二分の一まで外してしまうとは…いや、逆に約三六万分の一に当たったと考えれば運が良いのだろうか…」

八体の分身を倒した太刀を、再び肩に置く構えを取る。

「だが、これで一分の一…十割だ。覚悟は良いな？」

「クッ……………！」

完全に有利だと思われていた状況を、数秒の間で叩きのめされた狐炎は言葉を失っていた。分身が自分の実力の三分の一程度だとしても、それがそんな短い時間で全てが倒されたのだから、当然といえば当然だろう。

そして最大の問題は打つ手がほとんど無くなったことだった。

先程の分身が最大の術であり、あれを破られたとなれば狐炎にはもう一騎打ちしか手段がない。

「…ならば…！」

声と同時に狐炎は地を蹴り、陣馬の空へ高々と飛び上がった。

蒼い炎の尾を引きながら天へと昇り、最頂点に到達すると牙を真

理の方へと向けた。

狐炎の周囲に浮かんでいた火の玉が大きく膨れ上がる。

『……炎獄・爆——！』

追詰められた狐炎に出せる唯一の一手。

単純なる炎弾の放出だが、今までのどれよりも巨大な、そして莫大な熱量を持った一撃。

「鬼神流剣術——霧雨——」

だがそれも、真理の一撃によって火の粉となって散った。

数多の突きが雨となって天へ向かって放たれ、炎弾を掻き消し、小さな火の粉へと変えた。

『なら、これで……！』

滞空時間を利用し、もう一度空中から炎弾を放とうとしたところで、狐炎に異変が起きた。

今まで周囲を回っていた火の玉が突如火の粉となって風に吹き消され、狐炎も自身の体が全く動かなくなったのだった。

『な……に……？！』

ゆっくりと、落ちていく。

視界の色が失われていく。

己の存在が薄れていく。

徐々に近づく真理に対して、せめて爪の一撃でも与えようとするが、それすらも困難になるほど力が入らなくなっていた。

突然の事に驚きが隠せない中、静かな真理の声が聞こえた。

「……妖気欠乏か。九尾の化け狐としては呆気のない終わり方だったな」

『妖気……欠乏……ですって……！？』

聞き慣れない単語を口の中で反芻しながら、近づく敵に対して焦りを覚えていた。

「だがまあ、さすがにあれだけ大技を連発していれば、上級怪異……それも、お前ほどの妖気を持っていても使い果たしてしまうことは当然だな」

徐々に大きくなって聞こえてくる真理の声は淡々としていた。

「今まで弱者だけを相手にし、限界を知らないお前ならばもしかと思つて実行しては見たが…まさかこうも成功するとは…俺も予想外だった」

妖気は怪異の行動の源であり、人間を喰らう、他怪異を喰らうことによつてそれを己の身に蓄えることが可能である。

存在と同時に妖技の発動にも必要とし、これを消費することによつて莫大な威力を有する妖技の発動を可能とすることができ、様々な超常現象を起こすことが可能である。

だが、同時に己のエネルギーを大きく消耗するため、本来ならば先手、牽制、決め手程度にしか使わないことが怪異同士の本来の戦い方である。

だが、狐炎は自身を超える者を相手取つたことがなかつたがために、自身の限界を知らず、限界を超える妖気を消費してしまい、結果指一本動かすことすらままならない状況に陥つた、ということだ。歯を食縛ろうにも口に力が入らず、ただ重力の為すがままに地へと向かつて真つ直ぐに落ちていく。

真理は既に戦いは終わつたと言わんばかりに太刀を納めたが、その代わりに左拳を腰に構え、狐炎の落下に備えた。

「この好機を逃がす訳にも、お前を見逃す訳にもいかないのでな。これでお前の存在を終わりにさせてもらおう」

静かに息を吐き、はつきりと術式を唱えた。

「―神気収斂―」

その言葉と共に、真理の掌に眩い光が灯り始めた。

蛍火の様に、儚く、されども力強い光が。

渦を巻き、一転に集中する。

その光景に狐炎は驚きを隠すことが出来なかつた。

『あ…あなた…その光は……その《力》は…！？』

己に向けられた《力》に信じられないといった感情を込め、狐炎は吠えた。

『彼女を…食らったのですか！』

狐炎の問に対して、真理は静かに首を横に振った。

「……受け継いだんだ。彼女の夢を、叶えるために、な」

その顔は、何かを堪えるような、どこか悲しそうな顔だった。

だがそれも一瞬の事で、再び元の無表情へと戻る。

「そのために、ここでお前を完全に討伐する」

「神魔滅拳―螢火―」

神も、怪異も殺す光が、陣馬の街を優しく包み込んだ。

屋上の壊れた一部分から眩い光が差し込み、次の瞬間にコンクリートと鉄筋越しだというのにも関わらず大きな衝撃が最上階に走り、残された二人は叩きつけられるように床に倒れ付した。

陽菜子は何とかすぐに体を起こすことができたが、残念ながら拘束されているために立ち上がることができず、その場から立ち去ることができなかった。対して浦部季助の周囲を覆っていた蒼い炎による壁は衝撃が起ると同時に消え去り、立ち上がったこの男は周囲を見回し、何もないことを確認するとすぐに唯一生き残っているエレベータへとまっ先に駆け出した。

「い、生きている…！？ 私は生きている…！ ならこんな場所はすぐにでも…！」

そう言ってエレベータにたどり着くと、速く来い、という雰囲気が見えてわかるようにボタンを忙しく連打していた。

「速く、速く！ あんな化け物が来る前に…！」

その願いが通じなかったのか、エレベータが到着する前に天井が打ち砕かれ、屋上から何かが降り立った。

当然降ってきたのは朱鷺沼真理だ。

ただし、屋上へ飛び出したときとは異なり、髪は銀色から血のような深紅に染まっていた。手には太刀が握られ、下段に構えられて

いた。

悪事に心当たりのある季助にとっては死神にも見えた。

「さて、狐炎が居なくなつたから、かわりにお前の処分は俺が努めることになつた」

構えをそのままに真理はゆつくりと歩み寄つていった。

「ひ、ひいいいいい！？」

逃げようとするが後方は既に壁。

エレベータもまだ到着まで十階程あり、すぐには逃げ切れないことを悟らざるを得ない。

戦う気も当然無く、恐怖で腰を落とすのが限界だつた。

それでも歩み寄る速度は緩めず、あつという間に真理は季助の眼前へと立つた。

「浦部季助……お前は狐炎に協力し、この街にいくつもの不要な死人を出した……何か反論があれば情けに聞いてやろう」

太刀の切っ先を季助の喉元に軽く押し当て、低く冷たい声で静かに語つた。

「わ、私は……そう、騙されたんです！ あの花け物に……化け狐に！」

「それでも何人……何十人もの人を殺すことは十分に承知していたはずだ。己の浴のためにそれだけの尊い犠牲を出してもなお、被害者面をするのなら、此方にも考えがある」

一瞬、真理の太刀が季助の喉元を離れて、ようやく息ができると大きく口を開いた瞬間、季助の左肩から突如血が吹き出した。

「……………え？」

季助は何も分からず、血の出処に視線を向けると、肩から先が何もなかった。

本来そこにあるべきはずの「それ」は、季助の体からおよそ三メートル先の床に無造作に置かれていた。

紛うことなく、季助の腕だ。

「ひ、ひああああああああ！？ う、腕が？！ 私の腕が……ああああ！？」

ようやく痛みを感じ始め、切られた肩を押さえながら季助は無様に床を転げ始めた。

それでも血が流れ出ることを止めることはできず、更には顔面を硬い何かで抑えつけられて、転がることすらできなくなってしまうた。

覆われた視界の端から見えるものが、真理の上半身だということが分かってようやく顔を押しやっているものが真理の足だということに気が付いた。

「お前が人々に与えてきた痛みはこの程度ではない。それこそ前程度の命ならば幾千幾億並べても代え難いものだ！」

その体勢のまま、今度は右太腿に熱された鉄の棒を押し付けられたような感触に、季助は悲鳴を挙げた。

それも一瞬のものではなく、何度も、強弱を付けられた痛みが鈍く走った。

真理は両手で刀を持ち、季助の太腿を何度も何度も抉り出すように太刀を回していた。

「ぎゃあいあああ！ 痛い！ 痛い！ 血が――！」

「五月蠅い。そんなに血を見るのが嫌なら！」

と言つて、刺していた刀を太腿から引き抜き、そのまま横に一閃を放つ。

最後に斬ったのは、季助の両目。

刀を抜くと同時に抑えつけていた右足をどけて、容赦無く切り捨てたのだった。

「め…目が…目があああ！？」

残された右腕で目を押さえるが、触れれば逆に痛みが増してしまい、結局は何もせずにそこで倒れ伏す事しか出来なかった。

「…口が開けるうちに聞こう。アラム、村正、ガルガンシア…このいずれかの所在について、何か知っている事はあるか？」

突如出た名前に季助は驚きながらも、すぐには心当たりが思い浮かばず、首を勢い良く横に振った。

「し、知らない…そんな名前は聞いたことも…！」

「ならば狐炎が何かを言っていないかったか！？ 何かしらの通話を聞いたりなどだ！」

「ヒツ?!」

豹変した真理の気迫に思わず息を詰まらせて、季助は頭を押さえながら必死に何かを思い出そうとする。その間、真理は太刀の切っ先を胴に少しずつ刺していき、季助の思い出しを無理矢理促していた。

「い…出雲…だ」

思い至った地名を叫ぶと、刺されていた太刀が急に抜かれた。

傷は浅かったために胴からの出血は殆どなかったが、それも体全体からの出血量を考えれば意味の無いことだった。

「…出雲…だと？」

真理が反応した声を聞いて季助は首を縦に、もげるのではないかと思うほどの勢いで振って肯定を示した。

「そう、出雲だ！『出雲の方では面白い結果が出た、計画も順調です』と…そう私に言ってきたことがあった！ 私が知っていることはそれだけだ！」

「……そうか、出雲か。それなら第一級特殊立入禁止区域に指定されたことも十分に納得できるな……」

「死にたくない……死にたくない……！ 誰か、助けてくれ……！」

何か頷いている真理に対して季助は残った体を使って必死に命乞いをした。

それはとてもではないが、見られたものではなく、非道く惨めな姿だった。

「……………巫山戯るな……」

だが返ってきた言葉は非常に冷たいものだった。

「お前はどのように助けを求めた人間に対して何をした？ 手を差し伸べたか？ 身を挺して庇ったのか？ 違うだろう。見捨てて殺して欲を満たすために利用したのだろう。そんなお前に対して俺が

同情をすると思うか!？」

そのあまりに自分勝手な季助の発言に対し、真理は露骨に怒りを露わにした。

力任せに太刀を振り下ろし、今度は右腕を切り落とした。

「ぎゃあああああ!!」

「……悪に裁きは無ければならない、悪に報いは無くてはならない! 例えどんな理由があろうとも、だ!」

叫ぶ季助を見下しながら真理は太刀を大きく振り上げる。

先程放った神速の如き斬り下ろしの一刀・迅雷の構えだった。

「そして俺は……」

「この世全ての悪を背負わなければならない……」

悲痛の混じったような声を静かに呟きながら、その刀を振り下ろした。

男はその一刀のもとに、無残にも両断されることにより絶命した。

目を覆いたくなるような

耳を塞ぎたくなるような

顔を背けたくなるような

そんな惨状だった。

それでも陽菜子は、真理が季助を裁く場面から目を離すことが出来なかった。

何故か、と聞かれれば、答えられない。

とにかく、彼女は彼の行動から目を逸らすことが出来なかった。

これが正義なのだろうか。

これが王道なのだろうか。

人としての道を外れたものに、正しく裁きが降されて、陽菜子は内心感動していた。

正しき光がこの世に有ることを。

眩い光が闇を照らし出すことを。

実在することを知り、心が震えていた。

悪血に濡れる刀は鈍い真紅の水溜まりをつくり、水面には窓から指す月光が怪しく揺らめいていた。

静寂が訪れると、真理はぎこちない動きで陽菜子の方へと向き、ゆっくりと歩み寄った。

刀についた血を振り払い、静かに納めて、紅い光の粒へと変わっていった。

「……朱鷺沼君は……」

歩み寄る真理を見上げながら陽菜子は尋ねた。

「狐炎や浦部のような悪を倒す……正義の味方だったんですね？」

二人の距離が数歩、というところで真理は足を突然止めた。

真理は月を背にしているため、陽菜子からは彼の表情が影に隠れて全くと言って良いほどわからなかった。

正義と言われて、彼はどのような顔をしたのだろうか。

「俺は、正義ではない」

しばらくの間をもって返ってきたのは、否定の言葉だった。

気付けるかどうかというほど弱々しく、首を振られる。

化け物を相手取り、勝った男と同一人物とは思えないほど、力を感じられなかった。

「俺は、正義であつてはならない……」

怒りと悔やみ、そして悲しみを混ぜたような、非道く悲痛な声だった。

そんな姿を、陽菜子は見えていられなくなり、真理の言葉を必死に否定する。

「あなたが居なければ私は恐らく狐炎に殺されて、あの化け物の悪事の糧となっていました……そうならなかったのは、あなたが悪を倒す正義であつたからです」

ゆっくりと歩みを再開し、陽菜子の後方へと回り込んだ。

陽菜子は手足を拘束している錠を外すためだと思いながら、話を

続ける。

「私は信じます。朱鷺沼君が、本当の正義だと……」

そういったところで、突如陽菜子は眩暈に襲われた。

首筋に痛みと熱が走り、思考能力が急速に奪われていく。

「……………え？」

体の力が一瞬にして奪われ、自身の熱が失われていくことが嫌というほど感じられた。

最後の力を振り絞って視線を動かすと、真理の紅い髪が視界の端に写った。

彼の顔によって隠れた部分から痛みが、熱が走っていることは理解したが、それでも信じることができなかった。

「……………なん……で？」

それが、陽菜子がこの世に残した最後の言葉だった。

信じる者に裏切られた、そんな気持ちを引き連れたまま、彼女は黄泉への旅路へと着いた。

一週間後。

浦部ビル最上階にて坂井陽菜子と原型を留めていなかった浦部季助の遺体が発見され、陣馬市では大きな話題となった。

死因は互いに失血死。

だが二つの遺体には大きな違いがあった。

浦部季助が惨殺死体であったことに対して、坂井陽菜子は体に一切の傷の無い奇妙な失血死だった。

浦部の損傷から自殺は考えられず、当初は坂井陽菜子が浦部季助を殺害し、その後彼を殺した罪を感じて自殺をしたということも説として考えられたが、彼女の両手両足が鋼鉄製の手錠で拘束されていたこととその手錠から浦部の指紋が検出されたことからこの説は不可能と断定され、結局事件は犯人未定の未解決のままであった。

浦部グループは殺害される動機を調査している最中に計画について詳細が書かれた資料が発見され、警察はこれを見かねた不特定人

物が殺害したという認識になった。当然グループが今後この地で活動することを良しとする住民は一人もおらず、浦部グループは解体へと向かっていった。

現在は浦部に次ぐ不動産を主に扱う大手グループが都市開発を引き継ぎ、危険性のある場所は全て廃棄。本当の住民の為の都市開発が開始された。

一方、坂井陽菜子の周囲はどうなったかと言うと……学園の体育館にて全校生徒及び彼女の関係者による葬儀が行われた。

壇上に飾られた彼女の写真は、学園生ならば誰もが知っている優しい笑顔だった。

参列者の中には彼女の死に泣き出す者、彼女を殺した者への怒りを露わにする者とな様な感情が葬儀場で渦巻いていた。

ただ確実に言えることは、彼女は誰よりも人を愛した少女であつたために、彼女を愛していた生徒が、彼女のために感情を表していたのだ。

彼女のような善人が死ぬ必要がどこにあったのか。

彼女は死ぬべき人間ではなかったはずだ。

そんな言葉が時折小さく響いたが、それも涙声によってかき消された。

悪は消え去ったが、同時に善を失った。

それだけが、唯一、誰もが分かった事実だった。

——これは正義の物語ではない

これは矛盾に満ちた邪悪の物語である——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6893x/>

紅鬼-ORGA-

2011年12月31日18時53分発行